

2015年度 センター試験 本試験 国語

第1問 評論

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★☆☆	25分	佐々木敦、『未知との遭遇―無限のセカイと有限のワタシ』からの出題。「ネット上での啓蒙のベクトルが落ちている」という問題を指摘するところから始まり、リテラシーの形成が不十分であるという現状を指摘しつつも、自分はそれとは異なる次元にある未知への好奇心を刺激することをやりたいのだと、自身の立場を表明している。内容的に過去数年に比べて数段読みやすいものだった。	設問について、問2は、試験時間内に本文との整合性を確認していく作業が難しかったかもしれない。 問5、問6は、見慣れない出題形式であったが、落ち着いて取り組みれば十分対処できるレベルの問題だった。 2015年度は標準的な難易度の年だったといえるだろう。オーソドックスな設問が並んでいるので、記述問題の練習台としても十分活用することができる。間違えた場合は、「普通の問題」を間違えてしまったということを含頭において、「正答に至るまでのプロセス」と「誤答にたどりついてしまったプロセス」の両方を確認するようにして、今後活かしてほしい。

本文解説

段落解説

I 人類の長い歴史と新たな発想・知見との関係性(第1～第6段落)

筆者は、「自分で調べてもすぐにわかりそうなのに、どういうわけか他人に質問し」ている『教えて君』、そういった『教えて君』の要望を満たそうとして、「自分が知らないことを新たに知ることができる方向」に向かうどころか、「自分より知識や情報を持っていない方向」ってしまっている『教えてあげる君』の例を挙げ、ネット上で「啓蒙のベクトルが、どんどん落ちていく」という問題点を指摘する。

ところで、この『教えて君』と『教えてあげる君』の存在には、「自分が考えたことをすでに考えた誰かが必ずといっていいほど存在する」という現実が関係しているが、このようなことが起こるのは「人類がそれなりに長い歴史を持っているから」である。だが、人は「過去のすべてを知っているわけではない」ので、「オリジナルだと思ってリヴァイバルをしま」って、問題が生じることがあるが、筆者は「自分が考えつつあることと、他人が考えたことを、どこかのタイミングで突き合わせ」ることで、「現在よりも先に進むことができる」のだと述べる。

ここで、「メロディラインが非常に似通った曲が頻出し」ているということを取り上げて、「オリジナルを知らないのにもかかわらず、なぜかよく似てしま」う」ことに対する問題意識を示す。これについて、筆者は、人類は長い歴史の中でそれなりの数のメロディを書いてきたのだから、「誰かがふと思いついたメロディが過去に前例がある」ということは、確率論的にも起き易くなっていることであって、ある意味で不可避だと言ってもいい」と述べた上で、

もしそういったことが起こったなら「それを認めることは必要」だと主張する。一方で、「意識的な盗作」が行われても、「受け取る側のリテラシーの低さゆえに、オリジナルとして流通してしまう」ことがあることも指摘し、「一定のリテラシーが担保され」ることの必要性も主張している。

II 歴史に対する認識の変化（第7～第11段落）

〈I〉で見てきた問題は、人類が長い歴史の時間の流れの中でさまざまなか
とを行ってきた結果、「多様性」というものがある一定のレベルを超えてし
まったため生じているわけだが、私たちがきちんと知るべきこの「多様性」
を「何らかの意味でネガティブに受け取ってしまうのは、時間の流れとは別
に、それがひと塊のマッス（量）として、いきなり自分の前に現れたかのよ
うに思えるからではない」かと筆者は提言する。

歴史は時間の流れを含有しているため、物語として捉えられていたが、イ
ンターネットが登場し、「圧縮、編集」が起きやすくなり、歴史を「塊」とし
て捉えることが可能になり、そのような捉え方が主流となっていった。だが、
その結果、「多様性」をネガティブに受け取ってしまい、リテラシーの形成が
十分でないために、「意図的なバクリ」のような「弊害も起こってきた」。だ
から「啓蒙も必要」だと筆者も考えるようになったが、それでも啓蒙とは「異
なる次元にある、未知なるものへの好奇心／関心／興味を刺激すること」を
したいと自分自身の立場を表明している。

百字要旨

長い歴史の中での事象の蓄積が、ネット以後時間軸から離れ塊として人々
に受け取られたため、意図的なバクリなどの弊害が発生しており、リテラシー

の啓蒙は必要だが、筆者は未知への好奇心を刺激したいと考えている。（100
字）

用語解説

啓蒙 けいもう 人々に正しい知識を提供し、教え導くこと。

リテラシー 読み書き能力。知識を活用する能力。

閾値 いきち 反応を起こすのに必要な最低の刺激量。

因果 原因と結果。前の行為が、それに対応した結果となってあとに現れる

こと。不運な巡り合わせ。

モザイク 貝殻、ガラス、タイル、石などの小片を並べて模様を表した装飾

物。遺伝構成の異なる細胞から成る単一個体。体の一部で異なった遺伝的
形質が現れる。映像の解像度を落とし、マス目に区切って粗く表したもの。

設問解説

問1

正解 (ア) (イ) (ウ) (エ) (オ)

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 2分

設問パターン 知識・教養

解説

漢字の問題については、「たかが漢字一問」だが、「されど漢字一問」であ
る。傍線を引かれた漢字、選択肢の漢字ともにすべてを書くようにすれば、
練習のときには知識の漏れがないか確認できるし、本番では勘違いによる失

点を防げる。

解答選択肢

- (ア) 垂れる ①心酔 ②睡魔 ③無粋 ④自炊 ⑤懸垂
 (イ) 大概 ①該博 ②弾劾 ③形骸 ④感慨 ⑤概要
 (ウ) 潤沢 ①循環 ②湿潤 ③殉教者 ④巡回 ⑤純度
 (エ) 端的 ①丹精 ②枯淡 ③大胆 ④発端 ⑤探求
 (オ) 奏で ①捜査 ②双眼鏡 ③一掃 ④奏上 ⑤操業

問2 6

正解 ③

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 4分

設問パターン 理由説明型

解答範囲 I (第1〜第6段落) のうち、特に第1段落

解説

傍線部では、直前に「だから」という接続詞がある。これは、なぜ筆者がそう考えるのかを説明している部分を指し示していて、この「だから」が受けている範囲は、「そして両者が一緒になって、川が下流に流れ落ちるように、よりものを知らない人へ知らない人へと向かってしまうという現象があり」の部分である。

まず、『教えて君』は、「自分で調べてもすぐにわかりそうなのに、どういふわけか他人に質問するという存在」として語られていることがわかる。また、『教えてあげる君』は、「自分より知識や情報を持っていない方に向かう」と説明されている。これは、『教えて君』よりも『教えてあげる君』に「問

題』があるとかわざるを得ないだろう。また、一見『教えてあげる君』によって「啓蒙」されたかに思えた『教えて君』も、実は「主体的に新たな知識や情報を得ようとしたか」という点(自力で書物を読んだりフィールドワークに行ったりというようなこと)においては、その機会を『教えてあげる君』に奪われてしまったといっても過言ではないのである(これは本文中には書かれていないが、こう考えるのが妥当と思われる)。これが、「そして両者が一緒になって、川が下流に流れ落ちるように、よりものを知らない人へ知らない人へと向かってしまうという現象があり」という部分に相当する。さらに、傍線部の「場合によっては」のニュアンスは、「熱心に啓蒙をしているように思える『教えてあげる君』は、長い目で見ると、結局、『教えて君』が学ぶ機会を奪ってしまった」ということを受けているのだと思われる。これらをふまえた記述を探して、「知的好奇心を新たに引き出すこともない」は本文に明言されていない微妙な表現だが、そもそも本文中に「場合によっては」ということに対応する記述がないことも考慮して、正解は③。

不正解の選択肢

① 「無責任な回答」が本文中にない表現。『教えて君』の知的レベルを著しく低下させる「も『教えて君』だけに言及しているのがいまひとつ。『教えてあげる君』も新たに物事を知る方向には向かっていない。

② 「知識を押しつけるばかり」とあるが、『教えてあげる君』は本文中では教える存在として書かれているだけで、必ずしも「押しつける」というようなニュアンスは含まない。また、「その時点での相手の知的レベルに応じた回答をしているわけではない」も、本文で論じられているのはそういう問題ではない。「いたずらに困惑させてしまい」に該当する記述は本文中にない。「自らの教える行為を無意味なものにしてしまう」という

まとめ方もよくない。

- ④ 『教えて君』の向学心」が決定的にマズい。筆者は『教えて君』をそのようなポジティブな存在としてはみていない。これを見落としてはいけない。最後の「自分自身の知的レベルが向上していかない」についても、『教えて君』も『教えてあげる君』も知的レベルが向上しない」ことに對して筆者は問題意識をもっているわけだから、このまとめ方もあまりよくない。

- ⑤ 「自己満足を目的として教えている」という表現は本文中にはない。「知的レベルを向上させることには関心がない」かどうかは本文中では書かれていない。最後の「応答がむだに続いてしまう」も筆者の考えを十分に表現しているとは言い難い。

問3 7

正解 ②

難易度 ★☆☆☆☆

所要時間 3分

設問パターン 理由説明型＋知識・教養

解答範囲 I (第1～第6段落)のうち、特に第2～第6段落

解説

傍線部中の「これ」の指し示す範囲は「人類がそれなりに長い歴史を持っている」ということは「…」から「…数多く紡ぎ出されたということ」までである。つまり、「これ」は、「人類が過去に多くのメロディを作ってきたため、音楽家の作るメロディが過去に前例があるケースが多くなってきたこと」を表している。音楽家という職業を考えてほしい。彼らは芸術家として、ま

さに独創性が求められるわけである。だからこそ、本文中でも言及されているように「盗作、パクリという問題」が発生する。だが、「新しいメロディ」を作り出すことは難しくなってきた。こういった状況をふまえて、正解は②。

不正解の選択肢

① 「豊富な音楽の知識を活用する」が本文中にない表現。「その知識が自由な発想を妨げてしまう」とも述べていない。「躍動感のあるメロディ」に限定しているのもおかしい。

③ 「社会的な認知を得ていく」が本文中にない表現。「たえず新しい曲を発表しなければならぬ」という表現が微妙。いわゆる新曲ではなく、オリジナルという意味での新しさが問題なのだというのが伝わりにくい。また、「社会的な認知を得るために新しい曲を発表しなければならぬ」という論理は本文中にない。「過去のメロディを自作の一部として取り込むことが避けられなくなってきた」とは論理がおかしい。「過去のメロディの蓄積があるために、過去の楽曲と似た楽曲を作ってしまう」とあり得る」という話をしていて、過去のメロディを活用する」というようにもとれるこの記述は違和感がある。

④ 「曲のオリジナリティを正当に評価されることが難しく」は「リテラシーの低さ」を受けた表現だが、ここで論じられているのは別の問題。「才能がある音楽家ほど不満を抱くことが多くなってきている」は本文中にない表現。

⑤ 「過去に作られたメロディとの違いを確認する必要がある」とは「はやや言い過ぎ」「リテラシー」の必要性については触れているが、少し論点がずれる。「過去の膨大な曲を確認する時間と労力が大きな負担になってきて

いる」から「音楽家にとっては厳しい」という論理もおかしい。

問4 8

正解 ④

難易度 ★★☆☆☆☆

所要時間 3分

設問パターン 内容説明型

解答範囲 II (第7～第11段落) のうち、特に第7～第10段落

解説

傍線部を含む一文を読むと、『歴史』の崩壊は、「これ」が示す内容であることがわかり、「これ」が示すのは、「しかしネット以後、……」から「……」なってきたのではないかと思うのです「までである。まず、「崩壊」という言葉の意味するところを考える。崩壊とは、文字どおり「くずれてこわれてしまふこと」を指す。したがって、解答には「何がくずれてこわれたのか」という内容を盛り込む必要がある。また、「くずれてこわれたあとにどのようなものができた」のかも盛り込む必要があるだろう。変化前と変化後の両方を比較してはじめて変化を捉えることができる。さらに、どうしてくずれてこわれたかにも言及する必要がある。

本文から、「従来、歴史は時間の介在する物語として捉えられていたのが、塊として丸ごと捉えられるようになった」ことを『歴史』の崩壊と呼んでいるとわかる。このようなことが起こる原因となったのはインターネットである。ネットによって時間軸を無視して歴史を考えることが容易になったために、このような変化が起こったのである。これらをふまえた解答を探してみると、「過去の個々の出来事を時間的な前後関係から離れて自由に結びつけ」ることが「歴史を塊として丸ごと捉えること」の言い換えにあたるのか

やや迷うが、「時間軸」に即した『物語』としての『歴史』との対比関係を考えれば間違っていないと判断して、正解は④。

不正解の選択肢

① 「類似性を探し出す」が本文中で言及されていない表現。「両者の本質的な違いに着目することで得られる解釈を歴史と捉える理解」というような理解があったとは書いていない。

② 「多様性を尊重することが要求されるようになった」とは書いていない。これを「歴史をそのものとして丸ごと捉える」ことの言い換えと考えるのは、やや無理があるように思える。そもそも、多様性は「過去のメモリの蓄積」という前のテーマで用いられた言葉であり、ここでそれを用いるのは少し違和感がある。いちおうキープしておいてもいいが、最後には④との勝負に負ける。

③ 「重要度の違いによって分類する」という表現は本文中にない。「重要であるか否かを問題にすることなく等価なものとして拾い出された過去の出来事の集合体を歴史と捉える理解」ではなく、「時間軸に沿った出来事の因果関係を歴史と捉える理解」がフェードアウトしていったのである。

⑤ 「時間的な前後関係や因果関係を超えて結びつく過去と現在とのつながりを歴史と捉える理解の仕方が通用しなくなっ」たというのは本文の内容と真逆。これだけは絶対に選んではいけない。

問5 9

正解 ②

難易度 ★★☆☆☆☆

所要時間 4分

設問パターン 要旨把握型

解答範囲 I (第1～第6段落)・II (第7～第11段落)

解説

このような本文全体をふまえる設問では、記述問題のように解答を考えるのではなく、選択肢をいくつかの部分に区切ってポイントごとに正否を考えるようにすると時間短縮になる。また、ポイントを絞ることで解答の具体的なイメージも湧きやすくなる。

選択肢を見ると、この問題では、「現代がどのような時代か」(a)、「啓蒙とはどのような行為か」(b)、「筆者は啓蒙に対して肯定的なのかどうか」(c)、「a～cをふまえて筆者はどのようなことを考えているのか」(d)がポイントとなりそうである。

まず、aについてだが、これは本文中で現代のさまざまな側面について論じられており、いきなり一つのポイントに絞るのは難しそうなので、飛ばして考えることにする。bについてだが、筆者が啓蒙について論じているのは「最低限のリテラシーを形成する」という文脈であることをおさえておきたい。cについて、筆者は「啓蒙も必要なのかもしれない」という気持ちだが、僕にも多少は芽生えてきました」と述べている。dについて、筆者は、「やはり僕自身は、できれば啓蒙は他の人に任せておきたいのです」「僕はそれ(＝啓蒙)とは異なる次元にある、未知なるものへの好奇心／関心／興味を刺激することの方をやはりりたい」と自分の立場を表明している。

b、c、dのポイントをおおまかにおさえた選択肢を探すと、いきなり②だけに絞れる。そこで、②を詳細に見ていくと、aの部分、「膨大な情報に取り囲まれ」、「物事の判断基準が見失われた」という表現は本文中には見当たらないが、「最低限のリテラシーを形成するための啓蒙の必要性」の文脈にお

いて読み取れる。また、最後の「自力で新たな表現を生み出すよう促」したという部分も気になるが、筆者の「未知なるものへの好奇心／関心／興味を刺激する」、「現在よりも先に進む」という態度を反映した表現と考えれば納得できる。よって、正解は②。

不正解の選択肢

① 「個々の事象の背後にある知の意味が変質し」とは書かれていない。「過去の知見が軽視」というのも本文とはややずれた表現。「多様性」に対する我々の否定的な態度を問題と捉えているのである。「有効な啓蒙の方法を模索する」ことの必要性までには言及していない。あくまで、「啓蒙の必要性」にしか筆者は触れていない。

③ 「自力で考えることの意義が低下した現代」という表現は本文中にない。「啓蒙という行為についての責任を特定の誰かが負う必要はなくなった」は本文中にない表現で、しかも「自力で考えることの意義が低下した現代」において「啓蒙という行為についての責任を特定の誰かが負う必要はなくなった」という前後関係が意味不明。本文に「僕自身は、できれば啓蒙は他の人に任せておきたい」とあるので、「他者を啓蒙する場にとどまり続けたい」と筆者は思っていない。

④ 「過去に関する情報を容易に圧縮したり編集したりできるようになった」ということ、「外部から影響されることなく独創的な芸術表現を行うこと」の間に因果関係はない。筆者は「啓蒙という行為に積極的に関わ」ろうとしていない。

⑤ 筆者は「啓蒙の意義を否定し」ていない。むしろ逆。「歴史の束縛から解放されることによって現状を打破する」が意味不明。

問6

10

11

正解 ③・④

難易度 ★★★★★

所要時間 4分

設問パターン 表現・構成

解答範囲 I (第1～第6段落)・II (第7～第11段落)

解説

第5段落後半で、「～ない」という表現を伴うものとして、「新しいメモロディが、なかなか出てこない」ということは、別に悪いことではない。「自分の口ずさんだメモロディが、見知らぬ過去の誰かによって奏でられていたとしても、めげる必要はない。「他人がすでに自分と同じようなメモロディを作っていたことは」知らなかったんだから何が悪い、誰が何と言おうとこれは自分のものだ、ということではない。「他人がすでに自分と同じようなメモロディを作っていたことを」知らなかったこと自体は罪ではない」がある。この部分で筆者が論じているのは「新しいメモロディがなかなか出てこない」という話題についてだが、この話題について筆者は「新しいメモロディが出てこない」というようなことは起こりうるし、それに伴う問題が起こること自体は仕方がないので、それを認めて行動すればいい」と一貫して肯定の立場をとっている。したがって、「～ない」という表現を用いて「肯定の立場から否定の立場に転じ」た訳ではないので④は間違った記述。したがって、正解の一つは④。もう一つの判断が少し難しい。③についてだが、「そのこと」と短く受けることで、確かに次の展開への導入をスムーズなものにしているが、「次の段落への接続」という表現が微妙であることに気づく。「そのこと」と短く受けたのは、この問題について強調するための表現であり、「次の段落への接続」のためにとられた表現とはいえず適当でないことがわかる。したがって、もう一

この正解は③。

不正解の選択肢

- ① このような「君」付けの表現は目にしたことがあるだろう。筆者は二人一緒になってもものを知らないほうへと流れていく人たちを、「上から視線」で眺めていることになる。
- ② 筆者は自分の論を展開するのに熱が入って、畳みかけるような表現に変わっている。あるいは、畳みかけるような表現をとることで、読者に対して訴えかけようとしているといってもいい。
- ③ 3文目の「それ」、4文目の「それら」は、いずれも2文目の「目の前に立ちただかってくるもの、あるいは視線の向こう側に見えてくるもの」を指している。また、3文目、4文目は、文脈的に、2文目「あまりにも多過ぎて、どうにもげんがりしてしまう」を受けている。
- ④ 筆者は、第8段落から「塊として歴史が捉えられるようになった」ことについて触れ始め、「時間軸に沿った物語として捉えた歴史」と対比的に説明していく。第8段落から「カッコ付きの歴史」という表現をとり始めたのは、このことを明確にして、読者に注意を促すためである。
- ⑦ 「ある意味」と断ることで、『歴史観の変化』という意味で『崩壊』したのだ」ということを明確にしている。また、このように断ることで遠まわしに表現することができる。
- ⑧ 筆者はあくまでも啓蒙には関わらず、未知なるものに対する刺激を喚起することにに関わりたいと自分の立場を表明している。つまり、「啓蒙に関わりたくない」と自分は違う、距離があるということを尊敬表現によって際立たせている。

(制作：正木僚、中田敢士)

2015年度 センター試験 本試験 国語

第2問 小説

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★☆☆	20分	小池昌代の『感光生活』の中の「石を愛でる人」という一節からの出題。「石」によって他人に対する主人公の気持ちが変わっていくという不思議な人間関係が描写されており、過去数年とは対照的に、現代的な人々が描かれた小説だった。	設問の傾向としては例年どおりで見慣れない設問はなく、ほとんどが標準レベルの問題だった。どの年でもこのレベルで出題されるとは限らないが、同じような難易度で出題された場合はきちんと満点をとれるようにしたい。 ただ、問1(イ)は、日常生活の中で使わないような言葉についての意味を答える設問で、正答率が低かったようである。このような「教養」に関する設問は、普段から新聞や本を読んで知らない言葉に出合ったら辞書を引くという泥臭い「勉強」ができるかどうかにかかっているように思う。 また、問4は、選択肢を読んで解答を探し出すことは可能だが、自力で解答を書き上げるのは相当難しいと思われる。正しい解答にたどり着くためにはどのような思考のプロセスをたどればいいのかを考えて、記述問題の練習としても活用して欲しい。

本文解説

段落解説

I 「わたし」と石とのかかわりと「アイセキカ」の山形さん(1～28行目)

山形さんから「アイセキカ(愛石家)」友の会に入会したという話を聞かされる。実は、「わたし」も石が好きで、どこかへ行くと石を持ち帰ったりした。子供の頃、持ち帰った水辺の石は、水に濡れているときは魅力的だったものが乾いてしまうとただの石になってしまった。同じ石でも濡れている色と乾いた色は違うもので、実は水が石の魅力を作っていたのかもしれない。イタリアのアッシジで拾ってきた石は、イタリアの太陽の下で微妙な色の差を見せてくれたが、これは日本に帰ってきてからもその魅力が失われることはなかった。人間関係における行き交う言葉をめぐる疲労に一人で疲れきっているような夜、石を手の平の中で転がすと、石と自分がどこまでも混ざり合わない、無機質で冷たい関係に不思議な安らぎを感じたりする。こうしてみると、「わたし」もアイセキカのようにだ。

II 山形さんとの出会いと展覧会訪問の経緯(29～57行目)

山形さんは無口な人で、テレビ局の製作部門に勤務している。その山形さんが担当するインタビュー番組に出演させてもらって「わたし」は彼と知り合ったのであった。初めてのテレビ出演でひどく疲れ、また、詩人という肩書きに得意になって話した自分自身が気恥ずかしくなり、「わたし」は落ち込んでいた。山形さんは落ち込む「わたし」を慰めてくれたが、最終的に「わたし」もテレビ出演の魅力に取り憑かれると決め付けられる。そんな山形さんから石の展覧会への案内状が送られてきて、その強引さに「わたし」は仕

方なく承諾してしまう。

III 展覧会での観賞と「わたし」と山形さんとの距離の変化(58～115行目)

展覧会に行った日は雨だったが、石を見に行くにはいい日であるように思った。「わたし」は頭の上に開き、ひとりひとりを囲んでいる傘が好きだった。ある女性詩人は、寂しい、独りきりの傘の中を華やかな世界と表現していたが、彼女も雨の日は、傘が好きだったのだろう。アトリエには石が数多く展示されていたが、それを観覧する人はみんな一人ぼっちだった。山形さんの姿を目にしたが、「わたし」の思いは声にならず、表情だけで語りかけることになった。山形さんもまた、声を出さず表情だけでやりとりをした。山形さんが出品した石を見てみると、山形さんに声をかけられたが、その声は不思議な浸透力を持っていて、「わたし」は石から人間に戻ったと感じるようなほっとした気持ちになった。そのときの山形さんの目は、意外にも強い目ではなく、疲れ果てていて気弱な目をしていて。「わたし」は石に惹かれる山形さんの気持ちが少しわかったような気がした。そのとき、「わたし」も山形さんに惹かれていたのかもしれない。アトリエの外に出ると、山形さんは「わたし」を居酒屋に誘った。「いきましよう」と山形さんに言われたように感じ、人間も言葉を使わなければ石のようなもので、何を考えているかわからないが、結局石も人間も転がって互いにぶつかりあってわかりあうしかないのだと考えながら、「わたし」は山形さんに導かれ店内へと入っていく。

百字要旨

石が好きな「わたし」はテレビ出演をきっかけに知り合った山形さんの強引な誘いで石の展覧会に行く。そこで石に惹かれる山形さんを少し理解した

気がした「わたし」は、彼に惹かれているかもしれない自分に気づく。(99字)

用語解説

愛惜 あいせき 手放したり傷つけたりするのを惜しんで大切にすること。

無機質 鉱物の性質をもつこと。栄養素として生体に不可欠な元素。「無機質」な「↓冷淡で深い関わりをもたない。生命を感じさせない。」

希薄 液体の濃度、または気体の密度の小さいこと。一般に、少なく薄いこと。

図式的 図式で表現されるさま。型にはまったさま。

肩書き 氏名の右上に職名・居所などを書くこと。地位・身分・称号などをいう。犯人・容疑者などの前科。

タチ(質) 人の性質・体質。生まれつき。物事の性質。品質。
深淵 ふかいふち。

設問解説

問1 ～

正解 (ア) ③ (イ) ⑤ (ウ) ③

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 1分

設問パターン 知識・教養

解説と不正解の選択肢

(ア)

ここで「透明」という言葉は、直前の「石をただ見つめる」を受けている。

筆者は、「見つめる」という行為しかしないこと、そして「見つめる」行為の純粹性を「透明」と表現しているのである。よって正解は③。

- ① 「ぬくもり」が焦点になっているわけではない。
- ② 「悪意のない」という意味で限定した「純粹性」ではない。「見つめる」という行為そのものの混じりけのなさを「透明」だと表現している。
- ④ 「形のない」無形性が焦点になっているわけではない。
- ⑤ 「暗さのない」明るさが焦点になっているわけではない。

(イ)

「とくとくと」は「得得と」「得意気」という意味である。直前までの文脈から、半分素人のような顔をしながら遠慮がちではあったが、内心、詩人という肩書きを意識しながら語った自分のその態度を「とくとくと」と表現していることもわかる。正解は⑤。

- ① 「意欲満々」は得意気という意味合いからはズレた表現。
- ② 「満足」は得意気という意味合いからはズレた表現。
- ③ 「利害を考え」て話していたわけではない。
- ④ 「順番どおりに」話していたわけではない。

(ウ)

「追い討ち」は文字どおり、追いかけてさらに打撃を加えることである。『石を見に来い』と山形さんから案内状が届き、さらに電話をかけてきてまで誘われたことを「追い討ち」と表現しているのである。正解は③。

- ① 「無理に付きまとい」は一見正しそうだ、が、「追い討ち」に「付きまとい」というニュアンスは不適當であるように思われる。いちおうキープしておくが、最後には③との勝負に負ける。
- ② 「責め立てて」「いるわけではない」。

- ④ 山形さんが「時間の見境」がつけられないことを問題にしてはいない。
- ⑤ 「わざわざ調べ」ることは意味を限定しすぎ。

問2 15

正解 ②

難易度 ★☆☆☆☆

所要時間 2分

設問パターン 内容説明型

解答範囲 I (1～28行目)

解説

傍線部直前の「だから」は、「わたし」が傍線部のように考える理由となる部分を示す接続詞で、この「だから」が指すのは、「人間関係の疲労とは、行き交う言葉をめぐる疲労である」の部分である。つまり、行き交う言葉をめぐる人間関係の疲労のことを考えて、「わたし」は石に魅力を感じているのである。

「わたし」が石に魅力を感じる理由をふまえると、「言葉を持たない石のような冷やかさが、その冷たいあたたかさ」という表現は、17行目の「一人でいる夜、疲れて心がざらついているようなとき、……」から「……不思議な安らぎをあたえてくれる」までを受けたものであることがわかる。

ここで、石の「冷やかさ」は「行き交う言葉」が存在する人間関係との対立概念として表現されている。対立概念の一方を解答に含めなければならぬ場合、もう一方の対立概念まで言及すべき場合が多い。また、「冷たいあたたかさ」という表現にも注意が必要である。「冷たい」のに「あたたか」という表現は矛盾している。この矛盾した表現が成立する理由についても説明

が必要だ。「冷たい」というのは、「石とは言葉を交わすことができない」ことを示している（「人間関係における疲労」の対立概念であることからわかる）。「あたたかさ」というのは、「安らぎ」であることが読みとれる。「石と言葉を交わすことはできない」が「安らぎを感じる」という「論理の飛躍」は、「石と」コミュニケーションをとることはできないが、そのことのおかげで、人間関係においてつきまとう『行き交う言葉をめぐる疲労』を感じることはないため、そんな石から、かえって安心感を得られる」というようなものだとわかる。こう考えると、先ほどの「安らぎ」は「一人でいられることからもたらされる安らぎ」だということもわかる。また、この説明で、同時に「石」の対立概念である「人間関係」にも触れたことになる。

また、「とりわけ身にしみる」というのは、「そのことを強く実感する」とことだと考えていいだろう。

これらをふまえて選択肢を見ると、「疲れていらだった心」はやや限定し過ぎる印象があり、「ぼっとするような孤独」も言い過ぎていてる気もするが、互いに不干渉だから一人でいられることの言い換えと読みとって、正解は②。

不正解の選択肢

① 「石がもたらす緊張感」が本文にない表現。「自分が確かな存在であることと実感」は論点がズレている。「人としての自信を取り戻させてくれる」は右の部分で考察した「安らぎ」を表しているとは言い難い。

③ 「石の持つきびしい拒絶感」は、石と言葉を交わすことができないことを否定的に表現していて本文と逆。「周囲の人との心の通い合いの大切さがかえって切実に思えてくる」も本文と逆の方向の表現。人との関わりの煩わしさから解放されて一人でいられることに主人公は安らぎを得ているのである。これだけは絶対に選んではいけない選択肢。

④ 「現実の生活では時に嘘をつき自分を偽ることがある」というのは、「行き交う言葉をめぐる疲労」を受けているのだと思われるが、本文中にはそこまで具体的に説明していない。「虚飾のない本当の自分を強く実感できるといふこと」も本文中でそのように説明されているわけではない。さらに言うと、「あたたかさ」という論点からもズレしまっている。

⑤ 「水辺の石」に限定しているのがそもそもおかしい。「他人の言葉に傷ついたらわたしを静かに慰めてくれる」は「あたたかさ」を受けた表現だと思われるが、本文中ではそこまで具体的に記されていない。また、石の「冷たさ」にも言及していない。

問3

16

正解

③

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 2分

設問パターン 要旨把握型

解答範囲 II (29～57行目)

解説

わたしのもつ山形さんの人物像の変化は、「石のように無口で、無表情な人だったが、テレビに出演して落ち込んでるのを見て、のんびりとなくさめてくれた一方、最後には『わたし』がテレビに出演したくなるに違いないと決めつけた。その後、自分が出品した石の展示を見に来ることをしつこく勧誘し、わたしが断らないと一方的に決めつけるずうずうしさをもつ人だと思っただ」というようなものになるだろう。正解は③。

不正解の選択肢

- ① 「希望を与えてくれる」というような肯定的な描き方はされていない。
- ② 「テレビ出演の楽しさを説く」たのは「自信を持たせよう」としたわけではない。ただ単に、「わたし」のことをほかの多くの人と同じように決めつけてかかったからに過ぎない。ましてや、「度量の大きき」人物としても描かれていない。
- ④ 「わたしの心を気遣うふりをして、自身の趣味である石の魅力に引き込まう」としたわけではない。「気遣うふりをして」という表現はないし、そもそも、テレビ収録に関するエピソードと石の展覧会への案内のエピソードは因果関係、内容的なつながりはない。また、「わたし」が山形さんからの誘いに「戸惑った」という描写は本文中にないので、「戸惑いをくみ取る」としない」という表現も不適當。
- ⑤ 「自己嫌悪に陥ったわたしの心を見通したうえで話題をそらしてごまかし」という描写はない。「わたし」のことを慰めたが、結局最後にはほかの人と同じだと決めつけてしまったということであって、山形さんが「わたし」の心を気遣ってくれた気持ちは本物だと考えていいだろう。また、④と同じくテレビ収録に関するエピソードと石の展覧会への案内のエピソードは因果関係、内容的なつながりはない。「無責任な人物」という表現も本文中には見当たらない。

問4 17

正解 ①

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 3分

設問パターン 理由説明型＋心情説明型

解答範囲 I (1～28行目)・II (29～57行目)・III (58～115行目) の特に58～61行目の部分

解説

38行目の「傘というものがわたしは好きだ。……」から「……とりわけ素敵な美しいひとだった」までの範囲から、「わたし」はひとりひとりを囲んでくれる傘が好きだったから、傘をさすことができる雨の日が好きだったとわかる。また、自殺した女性詩人の話から、主人公も女性詩人の「華やかな世界」という傘の表現に共感していたことが読みとれる。つまり、「ひとりひとりを囲んでくれる傘をさすことの出来る雨の日」を、「石を見に行くのいい日だ」と「わたし」が考えた「理由」、すなわち、「論理の飛躍」を説明すればいい。

「わたし」にとって石は「一人でいられることの安らぎ」を与えてくれるものであった。これと、「ひとりひとりを囲んでくれる」傘との類似性に気付いてほしい。どちらも「一人でいることを保障、肯定してくれる」ものなのである。「同じようなもの」を重ね合わせることで、主人公が大切に思う「一人でいること」の尊さ、安心感を、より一層強く感じられると思ったのだと考えることができる。石と傘のオーバーラップという要素は必要だと思われる。(このことは、直接的に本文に書かれているわけではない。だが、断片的に与えられた情報から、論理的に判断できる範囲で考えて答えさせるというような問題も存在する)。

さて、ここでもう一つの可能性にも気付いてほしい。(～)の部分で「水」に関する描写が出てきたことを覚えているだろう。そこから、「わたし」が「水」というものに対して何らかの力を感じていたとわかる。10行目の「部屋

に持ち込まれた石はきままって急速に魅力を失い、……」から「……同じ石でも随分違う」の部分を読みまると、「わたし」は「水は石に魅力を与える」と考えていたのだとわかる。さらに、「雨の日」を、「石を見に行くのいい日だ」とした、その「論理の飛躍」のもう一つの可能性として、「雨天という条件の下、石がより魅力的になるかもしれないと考えたから」というようなことも考えられる。以上より正解は①となる。

不正解の選択肢

- ② 傘が「見方によって様々に姿を変える」という表現はない。「姿を変える」のは石だけ。「気分を高揚させる」という言い方も本文には書かれていない。「河原のようなアトリエにも水石の世界があることを知ってから」という言い方がおかしい。「河原のようなアトリエにも」というよりは、展覧会ではじめて水石の概念を知ったのである。「雨が思わぬ演出効果をもたらす」という書き方は、右の部分で考察したような「様々な条件下で石の魅力が変わる」ことはピントがずれた表現であるように感じる。「河原のようなアトリエにも水石の世界があることを知ってからは、……雨が思わぬ演出効果をもたらすと気づいた」という前後関係もおかしい。
- ③ 「女性詩人の顔の皺には精神的な陰影が刻まれ」が本文にない表現。皺があったとは書いてあるが、「精神的な陰影」があったとは書いていない。「石に似た魅力があった」と女性詩人の皺の精神的な陰影と石を対等に扱っているのも違和感をおぼえる。「孤独な詩人としての共感を覚えたから」石を見に行くのいい日だと思っただけではない。
- ④ 「乾いた石」と「濡れた石や雨」という対比が本文にない。「テレビに出演して自己嫌悪に陥ってからは、濡れた石や雨が自分の心を慰め」たと

も書いていない。

- ⑤ 「昔から誰にも邪魔されない孤独を愛していた」とまでは書いていない。ときに石が与えてくれる一人であることの安らぎを大切に思うこともあるといっただけである。傘のおかげで「外出の億劫さが和ら」ぐというの言い過ぎ。傘も石と同じように一人であることの安らぎを与えてくれるというだけである。「他人の目を気にせず石を見に行くこと」に価値を見出したということは書いていない。

問5

18

正解 ②

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 3分

設問パターン 内容説明型+要旨把握型

解答範囲 I (1～28行目)・II (29～57行目)・III (58～115行目)

解説

「何かを何かを少しずつひびびしている」の、主語の「何か」と目的語の「何か」が何を意味するのかを正しく把握する必要がある。また、傍線部に「ひびびっている」という表現が含まれているが、「ひびばられる」ことによって何らかの「変化」が生じる。ここでは、どこからどこへひびびっていったのかということを考えなければならぬ。さらにいうと、なぜその変化が起こったかについても触れておきたい。

二つの「何か」のうち、目的語の「何か」の方が比較的わかりやすい。「自分でもわかには信じられないことだが、わたしもそのとき、山形さんに、心を惹かれていたのかもしれない」という部分から、目的語の「何か」は「わ

たし」であることが読みとれる。同時に、ひっぱられていった方向は、「山形さんに、心を惹かれてい」く方向であったこともわかる。さらに、ここまでの問題で見たように、「わたし」はそれほど山形さんに好意をもっていないかった。それは、傍線部直前の「自分でもわかには信じられないことだが」の部分からも読みとれる。つまり、「どこからどこへひっぱっていたのか」を表す内容は、「ずうずうしい自信家だとみなしてそれほど好意をもっていなかった山形さんに『わたし』は惹かれていった」ということになる。とわかる。

では、「わたし」をひっぱっていったのは何なのか。97行目「山形さんの顔は、日に焼けて、真っ黒だ。……」から「……石に惹かれていいる山形さんが、そのとき少しだけ、わかったような気がした」に注目すると、「わたし」が山形さんに共感していることが読みとれる。その理由として、「目があった。出品された石と、良く似た漆黒の瞳である。……」から「……こんな目を山形さんはしていたのだろうか」の部分より、「意外にも、山形さんは疲れ果てて気弱な目をしていたことに気付いたから」だということがわかる。

また、94行目「その、確かに実在する男の声は、……」から「……どこかほっとする、あたたかい声だった」の部分についても考える必要があるだろう。「不思議な浸透力を持ってわたしの身体に入ってきた」どこかほっとする、あたたかい声だった」という描写から、山形さんの「声」によって「わたし」がひっぱられたことがわかる。さらに、「まるで、ついさっきまで、わたしは石であり、その声によって、ようやく人間に戻ったというような、どこかほっとする、あたたかい声」の部分と、ここまでで石が「わたし」にとつてどのようなものとして書かれていたかを合わせて考えよう。石は「わたし」に一人でいられることの安らぎを与えてくれる存在であり、展覧会では、石を見ているうちに「わたし」自身も石になってしまったが、山形さんの声で、

「わたし」は人間世界に引き戻されたかのように感じたのだとわかる。それも、疲労を感じるはずの人間世界への復帰だったにもかかわらず、なぜか山形さんの声にあたたかさを感じ、また、「ようやく人間に戻った」と感じる。これは、「一人でいられる安らぎを与えてくれる『石』の対立概念としての人間」というそれまでの「わたし」の価値観と逆転している。「わたし」は、「わたし」の考えを真逆のものにした（それも「人と関わる」という方向に変化させた）山形さんに「惹かれ」たのである。

ここまでをふまえて、「二人の心の距離が近づきつつある」が、「私」側だけでなく、山形さんの気持ちも含めた表現で、傍線部のあとの内容をふまえたライティング気味の表現のようにも思うが、本文のこれまでの部分から、山形さんは「わたし」に対してある程度好感をもっていたことは読みとれる。「わたしはどのようなことを感じはじめているのか」という設問なので、「わたし」の主観的な気持ちを表した表現と捉えれば、「わたし」は、山形さんに対して肯定的になって、山形さんはずっと自分に対して好感をもっていたことを受け入れられるようになったのだと考えて、「二人の心の距離が近づきつつある」と感じたのだと解釈して、正解は②。

不正解の選択肢

① 「人間としての奥行き」が微妙な表現。「強さと弱さが同居し」ていることを奥行きといっているのだろうか。本文中では、「奥行き」というニュアンスで説明されているわけではないように思う。ここは妥協するとしても、次の「自分にもそうした両面があることを発見し」が明らかに本文と一致しない。「わたし」が「強さ」（それも、山形さんの描写を考えると、「ずうずうしい」や「自信家」といった意味での「強さ」）を見つけたとは書いていない。したがって、そのあとの「似たもの同士」とい

う表現も正しくない。

③ 「寡黙な山形さんに石の世界のおもしろさを教えられ、彼の見識の高さに感動したわたしは、自分も同じように石を出品してみたいと感じはじめてい」が明らかに本文には記述されていない。

④ 「山形さんの落ち着いた人柄に惹かれ」たわけではない。山形さんの気弱な目と安心感を与えてくれた声の意外性から、「わたし」の心は動いたわけである。また、「山形さんが石を愛するようになったことで孤独を脱するきっかけを得た」とは本文に書いていない。

⑤ 「言葉を紹介した人間関係に困難を感じていたからこそ保たれていた石との関係」という記述がおかしい。「生身の人間との言葉による心の交流」では、山形さんの気弱な目にも心惹かれたことが表せていない。また、山形さんの声にあたたかさを感じたということを表現するのに、「生身の人間との言葉による心の交流」という言い方は不適当。

問6 19・20

正解 ①・⑤

難易度 ★★★★★

所要時間 4分

設問パターン 表現・構成

解説

⑤について、「(カッコ)と」「(カギカッコ)で表される言葉を追っていくと、確かに、カッコのものはすべて「言ったように思った」、「声にならない」「そんな気がした」といった表現を伴っている。逆に、カギカッコのものは、「声がした」という表現を伴うのは92行目のセリフだけである。一般的

にカギカッコで表されるのは実際の発言であり、また、カッコの場合だけ「声にならない」などの表現を伴って示している。その上で、カギカッコの場合にはそれだけで示すことで、実際にその言葉を発したことを暗示しているのだと考えられる。カギカッコで示される発言が実際に声に出されたものだと考えて矛盾はない。問題はもう一つの答えである。①についてだが、「アイセキカ」と書くことで、「わたし」がそれをぼんやりと捉えていること、つまり、「よくわからないが、石を愛する人、『愛石家』なるものがあるんだなあ」と考えていることを表現しているのだと解釈できるが、それは、確かに「愛石家」と書くよりも「意味を限定していない」といえる……のか？ ただ、ほかの選択肢に正答が見当たらないので、消去法から①が残ることになる。正解は①・⑤。

不正解の選択肢

② 「わたしの後悔を他人事として突き放すような、投げやりなもの」は言い過ぎ。確かに、自分の気持ちを「自信を持って決めつけ」られたと「わたし」は感じているが、山形さんは投げやりな気持ちから「わたし」に声をかけたとは考えにくい。47行目に「のんびりとなぐさめてくれた」とあるように、あくまで、「わたし」を気遣ってくれたのである。

③ 「軽んじる気持ちが生じた」が本文にない表現。むしろ、一人でいられる安心感を与えてくれるものとして、「わたし」は石を評価している。ここで、「ど」とも」という表現をとったのは、少し乱暴な言い方をする事で、「わたし」の石に対する親しみを表したり、期待通り小石がずらっと並んでいたりに対して小躍りするような気持ちを表すためだと考えられる。

④ 確かに、99行目以降、山形さんと「わたし」の距離が縮まる様子が描か

れており、この選択肢は悪くないように思える（実際、この選択肢を選んだ人も多いようだ）。ただ、本文を読み進めると、このあと、「わたし」は、人間関係における「石」という考え方に思いを巡らせている（108行目）。「言葉を使わないと、わたしたちもまた、石のようなものだ。何を考えているか、わからない。互いどころがっていくほかはない。石もひと、ころがり、ぶつかりあって、わかりあうしかない」。「わたし」は、それまで石と人間を完全に別のものとして考えていたが、実は、両者には重なる部分があるのだと気づいたのだとわかる。このように、「わたし」は、あくまでも石のことを念頭に置きながら人間を考えており、「石から次第に心が離れ」ていったとは言い難いだろう。

- ⑥ 「音が溢れ出た」、「音が流れ出た」というような表現は、音に関するありふれた表現の一つ。したがって、「わたしの表現技巧が以前と比べて洗練された」とは言い難い。

（制作…正木僚、中田敦士）

2015年度 センター試験 本試験 国語

第3問 古文

難易度	所要時間	出典
★★★★☆	15分	『夢の通り路（物語）』〈六〉 南北朝の末期に成立した長編の擬古物語の最終巻。作者未詳。源氏物語の影響を受け、古めかしく悲恋を描いた作品。帝の妻となった女君に思いを寄せ続ける男君は、光源氏を彷彿とさせる。また、柏木と女三の宮の話の基にしているといわれている。相思相愛の二人だったが、男君は不本意ながらほかの女性と結婚。女君に未練があり密会するが、女君は帝に召されて入内してしまう。逢瀬の望みを絶たれた男君は苦悩のうちに死に、女君も受戒し出家してしまう。死んだ男君がある高僧の夢に現れ、「三ノ宮（皇子として育つが実は男君と女君の子供）に見せてくれ」と巻物を託すところから物語は始まる。ストーリーはその巻物の中身という設定。三ノ宮は自分の出生の秘密を知って出家を願うが、諫められて断念する。 試験範囲の人間関係でさえ、受験生を混乱させてしまうほど複雑であり、さらに全6巻で登場人物は150人近くにのぼる大作となっている。

傾向と対策

『源氏物語』に強い影響を受けた擬古物語である問題文は、前書きからもわかるとおり、人間関係が複雑で、状況を把握するのが大変だったはずだ。本文全体の内容を問うた問6の正答率が4割と非常に低いことから、多くの受験生が複雑な内容を把握するのに苦労していたことがわかる。

センター試験は文法知識だけを問うのではなく、それらの知識をもとに、文章の内容をしっかりと誤解せずに理解しているかを問うている。

センター古文で失点をおさえ、8割を狙うなら、基本的な古文単語や文法事項の定着に励もう。動作の主体や対象を確認しながら、古文単語と古典文法にもとづいて丁寧に読むことで、基礎的な知識を問う問題はもちろん、心情把握、内容把握問題も正答できる。

また、和歌に関する設問に答えるには、和歌の修辭法の知識が不可欠である。知識で内容を把握し、それを基に読解力で文章を俯瞰的に理解することができるようになれば、センター試験で9割以上を安定して獲得することが可能になるだろう。

そして、試験中、時間がないからと焦って前書きを読み流してしまいがちだが、ここはむしろ、しっかりと時間をかけて人物関係を把握する姿勢をもとう。そうすることで、本文読解が何倍もスムーズになり、全体としての時間短縮が望める。ちなみに、(注)の直後の人物関係図も、読解を大いに助けてくれる重要なツールとなっている。問題に付されているヒントは積極的に活用したい。

本文解説

前書きの読解

前書きには設問を解く上で必要な情報がつめこまれており、これをよく読むか読み飛ばすかでは正答率も大きく変わってくる。特にこの年の場合、登場人物も多く、それぞれの人間関係も複雑なため、その傾向が顕著だ。

一番重要なのは、男君と女君は人目を忍んで逢う仲であったこと、女君は帝に召されて入内、皇子を出産したが、実はそれが帝ではなく男君との子であること、また、そのような状況の中、男君と女君がお互いを想い続けるが故に苦悩していること、といった、男君・女君・帝・御子の四者の関係を正確にイメージすることである。加えて、この前書きから、男君サイドに、清さだと右近という人物が登場してくることも予想ができるだろう。

本文の読解

第1段落

かたみに恋しう思し添ふことさままなれど、夢ならで通ひぬべき身ならねば、現の頼め絶えぬる心憂さのみ思しつづけ、大空をのみうち眺めつつ、もの心細く思しわたりけり。男の御心には、まして恨めしう、あぢきなぎ嘆きに添へて、御子の御気配もいとつつましう、鏡の影もをさをさ覚ゆれば、いよいよ「あきらめてしがな」と思しわたれど、ありしやうに語らひ人さへ聞こえねば、「人わろく、今さらかかつらひ、をこなるものに思ひまどはれむか」と心置かれて、清さだにだにも御心とけてものたまはず、いとどしき御物思ひをぞし給ひける。

現代語訳

(男君と女君は)互いに恋しく思いが募りなされることはさまざまだが、夢でなければ(相手の元へ)通える身ではないので、現実での(逢える)望みが絶えた辛さばかり思い続けなざって、大空ばかりを物思いに沈んでぼんやり眺めては、ずっと物寂しく思っていらっしゃった。男君の内心には、一層(女君に逢えないことが)恨めしく、女君へのどうにもならない恋の苦悩に加えて、(女君の)御子の様子も(尋ねるのは)大層気が引けて、鏡に映った男君自身の顔も御子の顔にどう見ても似ているので、ますます「御子が誰の子か(真実)をはっきりさせたい」と思い続けなさるが、(女君の入内)以前のよう相談相手(の右近)さえ(男君に)連絡を差し上げないので、「見苦しくも、今更(女君たちに)関わって、愚かな者だと困惑されるだろうか」とつい遠慮して、清さだにさえもお心を開いてお話しなさらず、いよいよ甚だしい御苦悩をなさった。

用語解説

かたみに お互いに。

頼む 「四段活用の場合」あてにする。「下二段活用の場合」あてにさせる。

本文では下二段で用いられ、「あてにさせる」から「望み」の意味がとれる。

眺む 物思いにふける。

あぢきなし おもしろくない。つまらない。どうしようもない。

気配 様子。

つつまし【慎まし】 遠慮される。

をこなり 愚かだ。ばかばかしい。

だに 〳〵さえ(類推)。せめて〳〵だけでも(最小限の限定)。

第2段落前半

こなたにも御心に絶えず思し嘆けど、何かは漏らし給はむ。御宿直などうちしきり、**おのづから**御前がちにて、御**こころざし**のになきさまになりまされるも、よに心憂く、恐ろしう、人知れず悩ましう思して、いささか御**局**に下り給へり。人少なう、しめやかに**ながめ**給へる夕暮れに、右近、御**側**に参りて、御かしらなど**参る**ついで、かの御事をほのかに聞こえ奉る。

「この程見奉りしに、御方々思しわづらふも**むべに**侍り。**げに**瘦せ瘦せとならせ給ひ、こよなく御色のさ青に見奉り候ひぬ。清さだも、久しううちおこたり侍りしを、いかに思しとちめけむと、日頃**いぶかしう**、恐ろしう思ひ給へられしに、なほ**恐び**はて給はぬにや、昨日文おこせし中に、かかるものなむ侍りける。『まことに、うち**悩み**給ふこと、日数へて**言ふ甲斐**なく、見奉るも心苦しう。東宮のいと**かなしう**まっはさせ給へば、とけても籠らせ給はぬを、この頃こそ、えうちつづきても参り給はで、ひとへに悩みまさらせ給へ』と侍りし」

とて、御消息取う出たれど、**なかなか**心憂く、そら恐ろしきに、

「いかで、かくは言ふにかあらむ」
とて、泣き給ひぬ。

「こたびは、とどめにも侍らむ。御覽せざらむは、罪深きことにこそ思ほさめ」
とて、うち泣きて、

「昔ながらの御ありさまならましかば、かくひき違ひ、いつこにも苦しき御心の添ふべきや」

と、**恐び**ても聞こゆれば、いとど恥づかしう、げに悲しくて、振り捨てやらずで御覽す。

現代語訳

こちら（女君の側）でも内心絶えずお嘆きになるが、どうして（皇子の出生の秘密を）お漏らしになるうか。帝の**寢所へのお召し**が度重なり、**自然と**帝のお側にいることが多く、帝の愛情がこの上なく深くなっていくのも、まことに辛く、恐ろしく、人知れずご気分が優れないようにお思いになって、少**しお部屋**に下がりがなされた。人気がなく、（女君が）しんみりと**物思いに耽**つておいでの夕暮れに、右近が、お側に参上して、御髪など**整え申し上げ**るついでに、あの（男君の）事をやんわりと申し上げる。

「近頃拝見致したところ、男君のご両親が（男君を）ご心配なさるのも**当然**でございます。実にお瘦せになり、ひどくお顔色が真っ青だと拝見しておりました。清さだも、長いことご無沙汰しておりましたが、（男君は女君のことを）どのように諦めなさったのかと、（私は）数日間**不思議に**、恐ろしく思い申し上げずにはいらなかったのですが、やはり**耐え**きれなさらなかったのでしょうか、昨日（清さだが）手紙をよこした中に、こんなものがありました。『本当に、（男君が）**お体を悪く**なさることは、日が経って**言いようもなく悪く**、（私清さだが）拝見するのもお気の毒だ。東宮がとても**可愛らしく**（男君に）つきまといなさるので、くつろいでお家に籠もっておいででなかったのに、最近では、連日参内なさることもできず、ひたすらご病状が悪化なさる一方だ』とございました」

と（女君に）申し上げて、（男君からの女君宛の）お手紙を取り出すが、（女君は話を聞くのが）**かえって**辛く、何となく恐ろしいので、
「どつして、こんな風に（辛い話を）口にするのだろうか」
と言ってお泣きになる。

「今回（の手紙）が、最後かもしれません。ご覧にならないのは、罪深いこ

とお思いあそばせ」

と(右近が)言つて泣き、

「貴女が入内なさる(以前どおりの(忍び逢う二人の)ご関係でしたら、このように予想に反して(貴女が入内なさり)、どちらも辛いお心が増したりはしなかつたでしょうに」

と、(涙を) **こぼらして** 申し上げると、一層恥ずかしく、本当に悲しくて、(手紙を) 振り捨ててしまえずご覧になる。

用語解説

宿直 夜に天皇や貴人の寝所に仕えること。

おのづから たまたま。自然と。

こころざし 愛情。お礼の贈り物。

局 個人用の居室。多くの場合、大きな建物の一部を仕切つて女房または后・

女御の居室としたもの。

参る 参上する(「来」「行く」の謙讓語)。召しあがる(「食ふ」の尊敬語)。

(目上の人に対し、何かをして) 差し上げる。本文では「差し上げる」の意味で用いられており、「御かしら(頭) など参る」で「御髪など整え申し上げる」の意。ほかに「御格子参る」で「格子をお上げる」、「大殿油参る」で「灯火をおつける」といった表現がある。

むべなり なるほど。当然だ。

げに 本当に。

いぶかし 気がかりだ。もっと知りたい。不思議だ。

忍ぶ がまんする。人目につかないようにする。

おこす よこす。

悩む 病気になる。

言ふ甲斐なし どうしようもない。つまらない。取るに足りない。

かなし いとしい。かわいらしい。

なかなか かえつて。

第2段落後半

「さりととも**頼め**し甲斐もなきあとに世のつねならぬ**ながめ**だにせよ

雲居のよそに見奉り、さるもの音調べし夕べより、心も乱れ、悩ましう思ひ給へしに、ほどなく魂の憂き身を捨てて、君があたり迷ひ出でなば、結びとめ給へかし。惜しけくあらぬ命も、まだ絶えはてねば」

など、**あはれに**、つねよりは**いと**と見所ありて書きすさみ給ふを御覧するに、**来し方行く先みなかきく**れて、御袖いたう濡らし給ふ。うち臥し給へるを、見奉るもいとほしう、「いかなりし世の御契りにや」と、思ひ嘆くめり。

「人目なき程に、あはれ、御返しを」

と聞こゆれば、御心も慌しくて、

「思はずも隔てしほどを嘆きてはもるともにこそ消えもはてなめ

遅るべうは」

とばかり、書かせ給ひても、え引き結び給はで、深く思し惑ひて泣き入り給ふ。「かやうにこと少なく、節なきものから、**いとどあはれにもいとほしう**も御覧せむ」と、方々思ひやるにも、悲しう見奉りぬ。

現代語訳

「そうはいっても(生きていればまた逢えるだろう)と

貴女が私に**期待をさせた**甲斐もなく、

虚しく私が死んだあとに

せめて並々ならぬ深い**物思い**をして下さい

貴女が入内し私の手の届かぬ宮中へ行ってしまったのを見申し上げて、帝と貴女の御前で、御簾越しに笛を披露したその夜から、心も乱れ、気分も優れないように思っておりましたが、もうすぐ魂が（この辛い私の）体を捨て（生霊となり）、貴女の方へさまよい出たら、（私の魂を）お引き留め下さいね。（貴女と逢えない今となっては）惜しくもない命も、まだ絶え果ててはいないので」

などと、**情趣深く**、いつもよりは**一層魅力的**に感情のほとばしるままにお書きになるのをご覧になると、（女君は）**未来も過去もみな暗い心に閉ざされ**て、お袖をひどく濡らし（て泣き）なされる。（女君が泣いて）突っ伏しておいでなのを、（右近は）**拝見するのも可哀想で**、「こんなにお苦しみになるなんて、男君と女君のお二人は）**どんな前世の宿縁**でいらっしやるのだろうか」と思い嘆くようだ。「人目のないうちに、ああ、ご返事を（お書き下さい）」（右近が）申し上げれば、（女君は）**お心も慌たたく**、

「（私達二人の）本意でないのに

離れてしまったことを嘆き悲しんでからは

貴方と一緒にきつと死んでしまおう

（貴方に）**死に遅れる**ものですか」

とだけ、お書きになっても、（涙が溢れて手紙を）お引き結びになることもできず、深く思い乱れて泣き入りなされる。「このように言葉少なく、これと言った箇所もないが、（男君は女君を）**一層愛おしくも不憫にも**思っ（て手紙を）ご覧になるだろう」と、男君と女君を思いやるにつけても、悲しく拝見した。

用語解説

雲居 宮中。

あはれなり しみじみと趣深い。

いとど いっそう。

来し方行く先 過去と未来。

かきくらす【掻き暗す】心を暗くする。

いとほし 気の毒だ。

契り 約束。宿縁。

遅る 遅れる。先立たれる。

要約

第1段落 悩む男君

女君が恋しい男君は、自分に似た、女君が皇子として産んだ子の父親を確かめたいが、右近や清さだに相談できず悩む。（54字）

第2段落前半 悩む女君

我が子の出生の秘密と深まる帝の寵愛に悩む女君が体調を崩し自室に下がると、右近が衰弱する男君の様子を女君に伝え男君からの手紙を渡す。（65字）

第2段落後半 男君と女君の和歌の贈答

死を予期した男君に「自分の魂がさまよい出たら引き留めて」と訴えられた女君は、男君が死んだら自分もすぐ後を追いたいと応えた。（60字、計180字）

設問解説

問1 21 23

正解 (ア) ④ (イ) ② (ウ) ①

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 1分30秒

設問パターン 傍線部の解釈(語彙+文脈)

傾向と対策

「傍線部、選択肢Ⅱ形容詞+名詞、副詞+動詞+目的語」のように分割。現代語の選択肢を文節(○が/○を/○した、などのまとまり)に分け、それに対応するように傍線部を区切る。そして、文節ごとに、古文の傍線部を解釈し、現代語の選択肢と照らし合わせよう。

(ア) あぢきなき／嘆き

思考方法

選択肢は「 α な/ α への+ β (名詞)」と分けられ、傍線部(ア)を分ける。「あぢきなき嘆きⅡ形容詞あぢきなし+名詞嘆き(β)」となる。慎重に語彙で考える。

β では③「憎しみ」、⑤「いらだち」がやや攻撃的すぎ、「嘆き」から遠い。③と⑤を消去。

「嘆き」を修飾する「あぢきなし」は「不当な・無駄な・不愉快な」という思いどおりでない状態を表す重要形容詞。②で β 「憐れみ」を修飾している形容詞「限らない」は「あぢきなし」の意味から外れるので②を消去。①と④から文脈に合う方を選ぶ。

①は仲介役の二人Ⅱ右近と清さだを男君が頼りなく思う記述はないので消

去。④「どうにもならない」「女君への恋の苦惱」はそれぞれ「あぢきなき」「嘆き」に合致。よって正解は④。

解説

「あぢきなき」はク活用形容詞「あぢきなし」の連体形である。「あぢきなし」の訳は「思うようにならない・努力のいかない・にがにがしい・道理に合わない・はかない・世が無常だ」である。自分の思いだけではどうにもならないことを意味するため、「つまらない・無駄だ・不愉快だ」という意味も表す。

「嘆き」は現代語とほぼ同じく「悲嘆・悲しみ・嘆願」の意味を表す。また、古文のみの意味として「ため息」という意味もある。

よって直訳すると「思いどおりにはいかない悲しみ」となる。前書きと直前の文より、男君の「思いどおりにはいかない悲しみ」とは、「女君との恋」であることがわかる。

本文のメインテーマを問われているため、正答率は比較的高かったようだ。

(イ) あきらめ／てしかな

思考方法

「あきらめてしかなⅡ動詞あきらむ+終助詞てしかな(Ⅱてしが+な)」。古文単語の動詞「あきらむ」は「明らか」と書き(心中・真実を)明らかにする」という意味。「あきらむ」に現代語の「諦める」の意味が出てくるのは近世(江戸時代)になってから。問題文は、舞台は平安時代、書かれたのは南北朝時代なので、「諦める」の意味はなかった時代だ。

ここで①「宮仕えを辞める」、③「思いを断ち切る」、⑤「私のことを(女君が諦めて)忘れる」という「諦める」意味の①、③、⑤を消去。

残る②、④は「明らか」の意味に近い。④「胸の内を聞いてほしい」もあ

りえそうだが、「鏡の影もをさをさ覚ゆれば、いよいよ『あきらめてしがな』、御子が自分そっくりなので、ますます②「真実（＝御子の父親が誰か）をはつきりさせたい」という文脈で②を選びたい。

解説

古文重要語「あきらむ」の意味を問う問題。

「諦める」意味は近世以降のもの。真実がはつきりすると諦めもつく、ということである。仏教に「四諦」という言葉がある。これは例えば「人生は苦しい」という真理、明らかにされたことを表す。諦めなくなる言葉だが、諦めているわけではない。

ちなみに、選択肢がすべて「○たい、○てほしい」という願望で終わるとに気付いた人は冴えている。これは願望の終助詞「てしがな」(12ページ《参考》を参照)の訳。①、②、③のような「〜たい(ものだ)」「は自己の願望を表し、④と⑤のような「〜てほしい(ものだ)」「は、あつらえ(他者への願望)を表している。

終助詞「てしがな」は自己の願望を表すので、④と⑤は不適切であることがわかる。ちなみに、あつらえを表すときは、未然形接続の終助詞「なむ」を用いる。

(ウ) 御いこころざしに／になきさまに／なりませぬ

思考方法

全選択肢は「帝のα(名詞)がβ(副詞)＋なつていく(＝程度が増していく)」「と分解可能。傍線部は「御いこころざしに／になきさまに／なりませぬ」で「御いこころざし」＝「帝の「御いこころざし」なりませぬ」の訳が「なつていく(＝程度が増していく)」「であることが確定。

文脈からすると、帝が女君を疑ったという記述はないため、「御いこころざし

＝帝のお疑い」としている⑤を消去する。①～④の「御いこころざし」にあたるαは、①「ご愛情」②「ご寵愛」③「お気持ち」④「お気遣い」とすべて女君への愛を表す。似た部分は解答の根拠になりにくいのでβに着目。①「この上なく」は最上級を表すのに対し、②「いっそう」③「いよいよ」④「ますます」は同じ段々増していく様を表すことに気づけば、①が正答だと推測できる。消去法で解くセンター試験においては「似た部分は解答の根拠になりにくい＝同じような他複数と異なる部分は解答の根拠になりやすい」のである。

ここで「になきさまに」は、「形容詞になし(の連体形：になき)＋名詞さま＋格助詞に」に分解できる。「になし」は「二無し」、つまり唯一無二という形容詞なので「になきさまに」＝「この上なく」で①が正解。細かい語彙なのでここができればほかの人に差をつけることができる。

解説

「いこころざし」は「意向・愛情・贈り物」の意味がある。古文の問題で問われやすいのは、現代語にはない「愛情・贈り物」の意味である。傍線部直前に、「御宿直とらまなどうちしきり、おのづから御前がちにて、」(＝女君が帝にたびたび寝所に召されて、自然と帝のそばにいる機会が増えている)とあることから、「御いこころざし」とは「帝からのご愛情・ご寵愛」であることがわかる。「になき」とは形容詞「になし(二無し)」「の連体形で、「二つとない・比べるものがないほどこの上ない」の意味。帝の女君への愛情が比べるものないほど深くなっていく様子を表している。よって正解は①。

「になし」と同じ意味の似た表現に、「さうなし(双無し)」、「またなし(又なし)」がある。

問2 24

正解 ⑤

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 2分

設問パターン 敬意の方向と敬語の種類

傾向と対策

敬語の識別問題では、敬意を表す動詞の意味をしっかりと暗記することが正答への近道である。また、頻出の「給ふ」「参る」「奉る」は尊敬と謙讓の意味があるため、判別の方法まで理解する必要がある。暗記には「面倒くさい・大変だ」というイメージがあるかもしれないが、敬語が識別できると、古文の読解はとてもスムーズになる。

思考方法

話し手、聞き手が誰か、誰の動作かに注目する。

a 動詞「侍り」は右近から主人の女君への会話文中での丁寧語。

b 補助動詞「給ふ（の未然形…給は）」は清さだが主人男君の動作を敬う尊敬語。

敬語。

c 補助動詞「給ふ（の連用形…給へ）」は男君が女君への手紙で自分の動作

「思ひ」を謙遜した謙讓語。

よって、敬意の方向と敬語の種類は、

a 右近↓女君、丁寧語

b 清さだ↓男君、尊敬語

c 男君↓女君、謙讓語

となり、⑤が正解。

解説

敬語の識別問題を解く上で鍵となるのは、敬語の種類をきちんと把握していることである。尊敬語の場合、敬意を示されているのは主体（いわゆる主語）。謙讓語の場合は、客体（目的語）。丁寧語の場合は、読み手・聞き手となる。

また、主語を把握すること、地の文なのか会話文や手紙の文なのかを判断することも重要である。地の文の場合は作者からの敬意、会話文・手紙の文の場合は会話主・書き手からの敬意を表す。

a 「侍り」は、本動詞の丁寧語である。また、直前に、「右近、御側に参りて、くほのかに聞こえ奉る」とあることから、この会話文の会話主は右近であり、聞き手は女君である。よってaは右近から女君への敬意を表す丁寧語である。

b 「給は」は、直前に「籠らせ」とあることから、補助動詞である。また、未然形での形から、尊敬語の四段活用の「給ふ」であることがわかる。直前の右近の台詞に、「清さだも、く昨日文おこせし中に、かかるものなむ侍りける」とあることから、bを含む『内は、清さだが主君である男君の様子を説明している手紙の内容だとわかる。よってbは、清さだから男君への敬意を表す尊敬語である。

c 「給へ」は、直前に、「思ひ」とあることから、補助動詞である。また、連用形接続の直接過去の助動詞「き」に「給へ」と接続していることから、ここの「給ふ」は下二段活用の謙讓語だとわかる。cは男君から女君への手紙中にあることから、cは、男君から女君への敬意を表す謙讓語である。

よって⑤が正解。

問3 25

正解 ③

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 3分

設問パターン 傍線部の心情説明

傾向と対策

心情説明の問題では、多くの問題で、「○○なため、××な気持ち」という形の選択肢が提示される。××は、主に傍線部の訳語が対応していることがほとんどだが、○○には、××という気持ちになった理由が入るため、直前の状況を把握することが大事である。今回は○○の部分^①が明確だったため、本年度で一番正答率が高い問題であろう。

思考方法

選択肢の構造は、

「右近に、 α されて恥ずかしくなり、また、 β されて、悲しく感じている」
 α と β 、つまり右近に何をされて女君が恥ずかしく、悲しくなったかを考える。

「御消息取う出たれど」^②傍線部 \times までには会話が三つ。順番に甲「いかで、 \sim 、乙」「こたびは、 \sim 、丙」「昔ながらの \sim 」とする。

会話直前に「御消息 \sim なかなか心憂く、空恐ろしきに」(男君の衰弱を聞くのが辛く怖い女君)とある。その上で会話を見ていこう。

甲「どうして、こんな風に(このような辛い話を)口にするの」

女君は男君の様子を聞くことを辛がる。手紙を読むのも辛い。

乙「今回(の手紙)が、最後かもしれません。ご覧にならないのは、罪深いこととお思いあそばせ」

右近は男君の様子を知ることがを怖がる女君に「最後の手紙かもしれない、(だから)読まない」と罪深い(死にそんな男君が成仏できない)「と手紙を読むよう促す。… α

丙「以前のまま(昔ながら)のご様子(御ありさま)でしたら、このように予想に反して(貴女が入内なさり)、どちらも辛いお心が増したりしなかったでしょうに」

右近は、「昔どおり密会できる関係だったら(女君が入内しなかったら)二人は会えずに苦しまなかった」と涙をこらえて(忍びて)言う。… β
 α と β が合致するのは③。よって、正解は③。

解説

誤っている選択肢の理由を順番に挙げる。読み間違いで気をつけたのは傍線部分である。

①の α と β は両方本文に記述がない。

②の α 、二人の仲を知られて恥ずかしいという記述なし。 β 、選択肢の「右近が声をひそめて話す \sim 二人の仲が公にできない」と思い知らされて「は、本文の「丙『 \sim 添ふべきや』と、忍びても聞こゆれば」の意味と対応していない。「忍ぶ」には「包み隠す」の意味もあるが、メインは「耐える \cdot こらえる」。二人の仲が公にできないことではなく、引き離されたことが悲しいのである。よって②を消去。

④の α 、男の手紙の内容は罪深いといえれば罪深いので \times にしにくい。 β 、選択肢の「男君の姿が元気だった頃(の姿)とは一変したので心苦しい」は本文の「丙『昔ながらの御ありさまならましかば、 \sim 、いつこにも苦しき御心の \sim 』の意味と対応していない。「昔ながらの御ありさま \parallel 元気だった頃の男の姿」だけなら不自然ではないが、尊敬の表現がある「苦しき御心」を侍女

右近の心苦しさと捉えるのは×。④は消去。

⑤のαとβはどちらも子供に関係するが、御子のことは話していない。α、選択肢の「子どもの面倒を見ないのは罪深いこと」は本文の「乙」。御覽ぜざらむは、罪深きこと』の訳として不適當。「見る(御覽ず)見るの尊敬語」は「面倒を見る」という意味もあるが、手紙を渡す場面なので「手紙を」お読みになる」と読まねばならない。β、選択肢に「子どもさえなければ帝も男君もここまで苦しまなかった」とあるが、帝が(御子の存在のため)苦しんでいる記述はない。⑤を消去。

問4 26

正解 ③

難易度 ★★☆☆

所要時間 3分

設問パターン 内容説明

傾向と対策

和歌の内容説明問題では、もちろん和歌の内容把握が重要である。和歌の読解の助けとなるのは、和歌前後の説明書きや補足である。和歌の周辺もちゃんと読み、読解の参考にしよう。

思考方法

男君↓女君の手紙A、女君↓男君の手紙Bの内容は《現代語訳》、《通読》参照。

選択肢の構造は

男君はαと言っている。それに対して、女君は、βと応えている。

本文より、Aで、男君は手の届かない宮中に女君が行ってしまったときか

ら、心身共に乱れており、魂(≡生霊)が体を離れて女君のもとへさまよい出たら、引き留めてほしいと言っている。

それに、対し、Bで女君は、男君に死に遅れるつもりはないと応えている。よって正解は③。

解説

選択肢の誤っている点をあぶり出そう。

①のα前半、「生きる」甲斐ではなく、「女君が」逢えると私に期待させた「甲斐」。「頼めし」期待させた「は」マ行下二段活用動詞「頼む」期待させる「が過去の助動詞「き」の連体形「し」に連用形で接続している形だ。α後半、「迷い出そうな魂もこの身にとどまって死にきれない」のではなく、「魂が(迷い出そうで)迷い出たら引き留めて下さいね(↑結び留め給へかし)。「結び留め給へ」で女君に求めていることに注意。βは問題なし。

②のα前半「あなたに逢えずに死んだら心臓を痛めることだけでもしてほしい」はAの和歌の解釈は◎だが、後半「死にきれないので私を受け入れてはくれないものか」は×。男君は女君から拒絶されていない。β前半「もはやあなた(男君)を愛することはできないが」ではなく、「自分が入内し二人が逢えなくなるとは(不本意にも(↑思はずも))」。後半「前世からの因縁と思えば」は記述なし。

④のα「あなたを恨みながら」「誰のせいであんなに死なされたか」は記述なし。やや女君を責めすぎている。「死ぬだろうが、その時には魂を引き留めて」ではなく「生霊となつてさまよい出た魂を引き留めて」といつている。A「惜しげくあらぬ命も、まだ絶えはてねば」から魂がさまよい出る時、男君はまだ生きていないことに注意。βは問題なし。

⑤のα、A和歌の「ながめ」を「空を眺める」と読んでいるし、「女君が空を

眺める。(そうすれば)男君の魂が女君のもとに行く」という因果関係の記述はない。β、「今逢えないことでさえもどかしく、あなたが死んだら魂の訪れなど待たずに」という記述なし。

問5 27

正解 ④

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 2分

設問パターン 傍線部の心情説明

傾向と対策

問3と同じく、心情説明の問題である。問3の傾向と対策で述べたように、直前の状況を把握し、問われている箇所を抽出しよう。

思考方法

悲しみに打ちひしがれる女君と女君が書いた返事を見た右近の心情は、傍線部Yの直後「かようにこと少なく、御覽せむ」であり、訳すと、「(人目を憚って、悲しみをこらえつつ書いたため、手紙は)このように短くありふれているが、男君は一層女君を愛おしく可哀想に思い手紙を読むだろう」となる。よって正解は④。逢えないのに想いを募らせる二人の辛い心を思う右近も辛い。

解説

各選択肢を精査してみよう。

① 女君が簡単な手紙しか書けないのは、「悲しみをこらえているから」「人が来る前に返事を書かねばならないから」などで「立場」ではない。男君が女君を「あはれにもいとほしうも愛おしくも可哀想にも」思い手

紙を読むだろう、という部分が①には反映されていない。

② 間違えてAⅡ女君の手紙、BⅡ男君の手紙としている。消去。

③ 「いとほしうも」に「落胆する」の意味なし。

「二人の別れを予感して」はいない。

⑤ 手紙が短いのは①同様に女君が「控えめな人柄」だからではない。

「二人の将来を危ぶんで」という記述はない。

問6 28

正解 ⑤

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 2分

設問パターン 文章の内容説明

傾向と対策

文章全体の内容把握問題では、すべての選択肢に目を通して素早く精査しなければならない。誤った記述や違和感をもたせるような表現があったら素早く本文に立ち返ろう。

思考方法

文章の内容説明の問題は、これまでの読解で把握した文章の内容を頭に入れながら、各選択肢を吟味して解こう。

全体を通じた選択肢の取捨選択こそが重要となる設問なので、思考方法はここまでとして解説に移ろう。

解説

① 男君が「未練がましく言い寄っても女君が不快に思うのではと恐れた」という内容が読み取れる記述はない。

- ② 女君が「男君への手紙を右近に取り次がせようとした」が間違い。
- ③ 清さだは「右近から手紙が来ないことを不審に思い、帝が真相に気づいたのではないかと心配になり、事情を知らせるようにと」ではなく主人の衰弱を伝えるために手紙を送ったのである。
- ④ 女君は「男君の様子を清さだから聞い」ていないし「東宮のもとへ無理に出仕したため」病気が重くなった訳ではない。
- ⑤ 「恐ろしく感じ」「当惑して」泣いた「無視もできずに手紙を読んだ」「絶望的な気持ちになった」がそれぞれ、「御消息取^と出^でたれど、なかなか心憂く、そら恐ろしきに」「泣き給ひぬ」「振り捨てやらで御覧ず」「来^こし方行く先みなかきくれて」に合致。よって正解は⑤。

【参考】「こそ+め」で命令／願望の終助詞「てしがな」／確述用法「な

む」／〈密通〉

「こそ+め」で命令

男君からの手紙を読むよう右近が女君に促す場面

「ご覧ぜざらむは罪深きことこそ思ほさめ」

傍線部の品詞分解は、

係助詞「こそ」+動詞「思ほす」未然形+助動詞「む」已然形

命令形がないのに「お思いあそばせ」と命令で訳すのは助動詞

「む」の意味の一つ「適當」(○)するのがよい(「が強調の係助詞」「こそ」で強まり、柔らかい命令になっているからだ。こういう単語同

士の相互作用を、正確な品詞分解を前提に、読まなきゃ罪深いですよ、という右近の咎めるような語気から感じられると敵なしだ。逆

に品詞が分からないようでは、読解など夢のまた夢である。文法知識なしに古典の未来はない。

願望の終助詞「てしがな」

願望の終助詞「てしがな」の由来は複雑なので、品詞分解だけいうと完了の助動詞「つ」連用形

+上代の願望の終助詞「しか」(連用形接続)

+詠嘆の終助詞「な」|| 「てしかな」↓「てしがな」

未来の話である願望で過去を指す完了を使うのは、現代でも「○だったら」ということから何となく頷ける。「しか(な)」単独での用例は稀で「つかぬ(この場合『にしがな』)」とセットで出現。

願望の終助詞にはほかに変わった形のものがある。それが「もがもな」だ。これの品詞分解は

上代の願望の終助詞「もが」

+詠嘆の終助詞「も」

+詠嘆の終助詞「な(よ、や等のパターンあり)」|| 「もがもな」

中古(平安)以降「も」が一つ落ちて「もがな」、「も」が落ちて「がな」と変化していった。

例) 世の中に さらぬ別れの なくもがな 千代もと祈る 人の子のため (伊勢物語)

将来の死別を悲しみ、子が親に送った歌。親にずっと生きていてほしいと祈る子のために死別なんてなければいいという意味。

「いかでこのかくや姫を得てしがな、見てしがなと」(竹取物語)

いかで〜どうにかして 得てしがなく得たい 見てしがなく結婚したいという男達の言葉。生々しくて心に残る。

「てしがな」も「もがもな」も特徴的なので知らなければ驚くが、知っていれば一目瞭然だ。

確述用法「なむ」

確述用法「なむ」の品詞分解は

助動詞「ぬ」の未然形＋助動詞「む」(未然形接続)

文法書には必ず載っている。右に助動詞の意味を書かなかった理由は、「ぬ」の意味は完了か強意の二通りのどちらでもよく、「む」の意味は推量とは限らないからである。推量、意志、可能、仮定、婉曲、適當の六つの意味が「む」にはある。「なむ」の訳はこれら「む」の意味を強調した訳だ。つまり「必ず、きつと」○に違いない・○しよう・○できよう」「当然○のはずだ」、仮定、婉曲とはばして「○してしまうのがよい」「○してはくれませんか」という感じ。

・係助詞「なむ」

・願望の終助詞「なむ」

・ナ行変格活用動詞の未然形活用語尾「な」＋助動詞「む」の「なむ」

を識別させる問題は文法問題で頻出。

〈密通〉

〈密通〉は古典ラブストーリーでありがち。通い婚が一般的だった時代、複数の妻をもつのは珍しくなかったが、既婚女性が別の男に通われるのは立派な不道德、不倫だった。大御所の源氏物語は光源氏と藤壺の宮(夫は光源氏の父、桐壺帝)、柏木と女三の宮(夫は光源氏) などと密通に溢れているし、伊勢物語には、何と齋王(伊勢の齋宮で巫女を務める皇女)との、神様を敵にまわす密通も登場

する。気になったら読んでみてもよい。

余談だが、伊勢物語や宇治拾遺物語、日本永代蔵などの大体短くて一話完結の古典で古文を読み慣れるのはオススメ。面白い話ならなお良い。大体現代語訳付きなので、ふーん、と一度原文を読んで訳を見る感じ。源氏物語など有名なところのストーリーを知ると合わせて、やさしい古文の原文を暇な時ポチポチ読むのも、思ったより力になる。これなら読めそう、と思えるコンテンツに触れてみると楽しいぞ。筆者は外国語や古典のもつ「パツと見意味不明な文が読めるようになる」快感の虜だ。暗号解読班になったような気分がワクワクしながら読もう。

古典の問題はありがたいお話かラブストーリーか、笑い話。

場面をイメージしつつ読もう。大事な単語、文法知識は潔く覚えよう。

(制作：松田朋佳)

2015年度 センター試験 本試験 国語

第4問 漢文

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★☆☆	15分	『篁墩文集』(巻十一 狸奴論) (祭祀・礼制・教育管轄の役所の次官まで出世した明代の官僚、学者)であった。そんなお堅いおっちゃんだから、我が家の猫の親子から昔の皇族親子に話が飛んで、親が子を慈しみ子が親に孝行する儒教道徳を語るのである。	本文の分量は200字程度で、標準的な長さ。およそ五分の一を(注)で説明しており、(注)のない部分にもこれといって難解な字や句形はなく理解しやすい。解答の順番は、おおむね本文に沿って 問2(ア)↓問1(1)↓問2(イ)↓問4↓問5↓問1(2)↓問6↓問7↓問3 とするのが最も自然で効率も良い。 2015年度は「迷い始めると迷路にはまり込む問題」が多かったように見受けられる。なかなか正解が一つに絞れない場合は、視野を広げて周りの文脈を読み返したり、逆に視野を狭めて文法から解いたりとアプローチの方法を工夫してほしい。どうしても正解がわからず保留にする場合、その設

傾向と対策
問のマーク欄に薄く横線を引くなどしてから次の設問に進もう。どの設問が保留になっているか一目でわかるし、何よりマークミスを防げる。注意が必要な設問をいくつか取り上げ、対策を併記するので今後の学習に生かしてほしい。 問2(ア)は、何とも性悪な設問。少なくとも私(解説者)の場合、「前半のみ読みが同じ再読文字を、選択肢に三つも入って受験生を惑わす」という出題者の術中にまんまとはまっただ。さすがに正解はしたものの、かなり時間を食ったことをいまだに覚えている。この設問を見た受験生の多くは「え、『』も『心』も『且』も『まさ』って読むじゃん」と混乱してしまったのではないか。それでも選択肢①〜⑤の書き下しを問題用紙に書いてみれば、再読文字を二度目に読む時の送り仮名の違いに気づけたはずだ。つまりこの設問を解くには、再読文字を送り仮名の部分まで含めて正確に覚えている必要があった。再読文字はいずれもセンター漢文の最頻出事項なので、意味・読みを合わせて正確に覚えておこう。 問6は、返り点付きの文の書き下しでほかの設問に比べて正答率が低かった。傍線部が長いので複雑で難しいように見えるが、「選択肢を見た目どおり読点で区切り、部分ごとに比較する」という、センター試験のほぼ全科目に共通するコツを本番でも忘れずに実践すれば正解できるだろう。

本文解説

赤は重要語句 青は覚えておくと良い語句

第1段落 親子になった猫

書き下し文

家に一老狸奴を蓄ふ。将に子を誕まんとす。一女童誤りて之に触れ、而して墮す。日夕鳴鳴然たり。会、両小狸奴を餽る者有り。其の始め、蓋し漠然として相ひ能くせざるなり。老狸奴なる者、従ひて之を撫し、徬徨焉たり、躑躅焉たり。臥すれば則ち之を擁し、行けば則ち之を翊く。其の舐を舐めて之に食を譲る。両小狸奴なる者も、亦た久しくして相ひ忘るるなり。稍く之に即ぎ、遂にその乳を承く。是れより欣然として以て良に己の母なりと為す。老狸奴なる者も、亦た居然として以て良に己が出だすと為すなり。吁、亦た異なるかな。

現代語訳

私(＝作者)の家で一匹の老猫を飼っていた。(老猫は)出産間近だった。一人の下女が誤ってこの老猫にぶつかり、そのため(老猫は)流産してしまった。(老猫は)昼も夜も嘆き悲しみ鳴いていた。たまたま二匹の子猫をくれた人がいた。(子猫たちは、老猫に会った)当初は、思うに(＝子猫の気持ちを推測するに)(老猫に)無関心で懐かなかった。老猫は、つきっきりでこの子猫たちをかわいがり、(子猫たちの周りを)うろついたり、足踏みしたりして(落ちて着かなかつ)た。(子猫たちが)寝転がる子猫たちを抱き、歩くと子猫たちを助けてやった。(老猫は)子猫たちのうぶ毛を舐めてやり、子猫たちにエサを譲ってやった。二匹の子猫も、(老猫が妻の子を忘れて子猫たちをかわいがったのと)同じようにしばらくして(実の母を)忘れてしまった。

(子猫たちは)だんだん老猫に寄り添い、ついに老猫の乳を受け入れた。それから(子猫たちは)喜々として(老猫を)本当に自分たちの母だと思い、老猫も同じように(子猫たちがいると)安らかな様子で(子猫たちを)本当に自分が産んだ子だと思った。ああ、何と奇異なことか！

文法解説

①文目は「蓄フ(V)一老狸奴ヲ(O)」という漢文の基本的語順SVO。「将ニノントス」は重要な再読文字で「且ニノントス」と同義。「いまにもしそう」のほか「いますぐししよう」という意志も表す。ちなみに「将」は①動詞「将(＝率)ある」②名詞「将(將軍・大将)」も表す。「女童」は、ここでは女の子ではなく召使の女、下女のこと。古文でも下女を「女の童」ということがある。

「触し」は「触って」より「ぶつかって」のほうが自然。接触事故の「触」。而シテはここでは順接の接続詞。詳しくは10ページの《参考》を見てほしい。

「日夕ニ晷も夜も」はあまり日常で使う機会はないが、一応キーボードで打つと出てくる熟語。

「会」餽ルは受験生にとって難しい読みなのでふりがなが付きた。(注)はなので訓読みのままの意味、ということ。訳は容易。

6文目の指示語「其ノ」は一つ前の文の状況を指すと考えられる。

「蓋シ」の意味は①「おそらく・思うに」という推量、②「そもそも」という文の書き出し。再読文字なら「蓋シ」AとしてAでない／しないのか(、Aであれば／すればよい)という反語で「蓋シ不レA」という風に再読文字でない(二回目に読む「ズル」を「不」が肩代わりする)用法もあり、再読してもしなくても「蓋シ」とイコール。↑こちらは「けだし」とは読

まない。現代語でも「蓋然性（＝確率）」という言葉があり「蓋し」の推量（～かもしれない）の意味を残す。

「相ヒ」は「互いに」と訳する副詞のほか、動作が対象に及ぶことを表す副詞でもあるが、この意味は訳しづらいので訳さないことが多い。本文の場合「互いに」動作をしてはいないので訳さないほうと判断する。

5文目では「能」を「能クス」と読んで動詞扱いしているが、可能・不可能を表す助動詞として用いられる場合も多い。その場合、肯定なら「能クス」と読み、可能を表す。否定なら「不能」で「能はず」と読み、不可能を表す。

「者」には現代語と同じく「人」という意味（曲者・何者の「者」）のほか、直前の語をクローズアップする働きもあり、7・10・13文目の「者」は「老狸奴」を主語として目立たせている。この場合「者」は「老狸奴」者と読んでよく「老狸奴八」というように読まない字としてもよい。

「焉」の意味は7ページの問3の《解説》dを参照してほしいが、この文では何と語調を整える「焉」を読んではまっている。理由は簡単。「焉」を読んだほうが良い、とこの漢文を読み下した日本人が思ったからだ。つまり、この文章の著者、程敏政の意思とは無関係に、昔の日本人が勝手に読み方を決めてしまったのだ。ふざけるな、と憤るかもしれない。あきらめるかもしれない。しかしこれは自然なことなのだ。漢文というのは、「昔の日本人が中国語文をそのまま（読む順番を変え）強引に日本語に直してしまった」文化で、読み方自体はハッキリ言って習慣である。そう読まれてきたというだけで正解はないともいえる。何せ「文選読み」といって漢字をいちいち音読み↓訓読みの順に二度読む読み方さえあるのだ。「例」蟋蟀のキリギリス（ちなみに現在「蟋蟀」の訓読みは「こおろぎ」）

「Aスレバ則チB」は有名な「レバ則」。大体「Aすると（そこで）B」と順接で訳すが、「AするとかえってB」と逆接で訳すこともある。「而」同様、文脈から判断しよう。

7～9文目の指示語「之」は「小狸奴（＝子猫）」を指すが、11文目の「之」は「老狸奴（＝老猫）」を指すので注意。

「亦タ」は「同じように」と訳す副詞。「兩小狸奴ナル者モ」のように直前の字に「A亦」と送り仮名「モ」をつける。

「稍ク」は読みにつられて「ようやく・やっと」と訳すだけでは足りない。古文の「やうやう」同様「次第に・だんだんと」という訳も候補に入れよう。「遂ニ」も訓読みの「ついに・とうとう」の訳だけでなく「そのまますぐ、その結果」というなだれ込むイメージの訳が必要。「剣を抜いて斬ると」蛇遂二分カレテ兩ツト為ル：蛇はたちまち真つ二つ！」なんて文もある。

「前置詞十是」の形の語句は多く、どれも重要な接続詞の役目を果たす。「自是」は「それ以来・それから」、「於是」は「この時にあたって・このため」、「以是（故）是、用是」は「それゆえ・そのため」と訳す。

「以為レB（以テBト為ス）」は「以レA為レB（Aヲ以テBト為ス）」↓AをBと思う」のAを省略したもので、「自是」で始まる文では「老狸奴」が、その次の文では「兩小狸奴」が省略された目的語の部分である。「Bと思う」と訳し、また「以為B」という書き下し方もある。こう書き下すほうが動詞「おもふ」が入っている分、訳が浮かびやすい。

「亦タ」は「亦A」又は「亦A」で「何とAなことよ！」という詠嘆だ。

「異ナルかな」は「異常・異」なるの「違う」イメージではなく、「特異・奇異」の「変わっている」イメージで「珍しい、奇異だなあ」と訳す。

第2段落 明德馬后、章帝母子ノまとめ

書き下し文

昔、漢の明德馬后に子無し。顕宗他の人子を取り、命じて之を養はしめて曰はく、「人子何ぞ必ずしも親ら生まんや。但だ愛の至らざるを恨むのみ」と。后遂に心を尽くして撫育し、而して章帝も亦た恩性天至たり。母子の慈孝、始終織芥の間無し。狸奴の事、適に契ふ有り。然らば則ち世の人親と子と為りて、不慈不孝なる者有るは、豈に独り古人に愧づるのみならんや。亦た此の異類に愧づるのみ。

現代語訳

昔、漢の明德馬后には子どもがなかった。(明德馬后の夫の) 顕宗がほかの(后が産んだ) 子を引き取り、(明德馬后に) 命じてこの子供を養育させて言うには、「子というものは、**どうして自分で生まねばならぬだろうか**」(いや自分で生んだ子でなくてもよい)。**ただ**(実の子であるかどうかに関わらず、子というのは親からの) 愛情が足りないこと**だけを**恨むのだ」と。明德馬后はその**結果として**心を尽くして(養子を) 大事に育て、(養子である) 章帝にも(明德馬后が子への愛情をもっていたのと) **同じように**親への愛情が自然に備わっていった。母子の愛情は、ずっと少しの隔たりもなかった。我が家の猫の事例は、**ちょうど**(この母子の話と) 共通点がある。ならば世間で親と子となり、それなのに(親が子を) 慈しまず(子が親に) 孝行しない者がいるのは、**どうして**昔の人(≡明德馬后・章帝母子のような愛情ある親子)に対して**だけ**恥ずかしい**だろうか**、(いや昔の人に対してだけ恥ずかしいのではない)。**この人外の者**(≡親子になった老猫と子猫たち)に対して**も**恥ずかしい**のだ**。

文法解説

「子」は「子(≡あなた・先生)」とも読むので注意。

2文目の「養」は「使・令・遣・教」のような使役の字がないのに「養ハシメテ」と使役形になっている。このように、使役の意味が含まれることが明らかな場合は、使役の字がなくても使役形で訳されることがある(解説者の私も大学で習って初めて意識した)。ちなみに漢文で使う使役の助動詞は「シム」だけだ。もし「養ハセテ」と読むなら、それは「養ハス」という他動詞。「何ゾ必ずシモクセン(ヤ)ノナラン(ヤ)」は8ページの問5の《解説》、「但ダノミ」は6ページの問3の《解説》cを参照。

「親フ」は「親政≡天子がみずから行う政治」の「親」だ。ただし、今回の場合は「親」と読むこともでき、意味もあまり変わらない。

「遂ニ」は3ページ参照。

「撫育」は見慣れない熟語だが、「撫育ス」という動詞であることと文脈から「大事に育てる」という意味は必ず想像できるはずだ。

4文目は簡単な文だが、「母と子」「慈と孝」の対応がわかると底の底まで読めているといえよう。

5文目「適ニ」の訳は「ちょうど」だが「適」一字で「適」と読み「偶然、たまたま」と訳すこともある。「適」と読む場合は「ちょうど」の意味はないが、混同している参考書もあるので注意が必要。

「豈ニ独リノミナランヤ」は反語「豈ニ」(≡ナランヤ)として「(≡) だろうか」(いや)「(≡) でない」(≡) に限定の「独リノミ」だけが入った形だ。あとの「亦タ」とセットで累加という句形を作るが句形の名前はどうでもよく「反語+限定」とわかり訳せれば良い。

最後の文の「已」は限定というよりは断定・強意。

要約

第1段落 親子になった猫

老猫が死産したあと、二匹の子猫を譲り受けた。初め子猫たちは老猫に懐かなかつたが、老猫が大切に育てるうちに実の親を忘れて懐き、老猫と本当の親子のようになった。(77字)

第2段落 明德馬后、章帝母子／まとめ

子どもがない明德馬后は他の后の子を大事に育て、養子の章帝との間に深い愛情を育んだ。／世間に愛情のない親子がいることは昔の人だけでなく猫に対しても恥だ。(74字、計151字)

設問解説

問1 29・30

正解 (1) ⑤ (2) ③

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 2分

設問パターン 文中の漢字の意味

(1)

思考方法

漢字の意味&文脈(漢字の「文中での」意味)の二刀流で考えよう。

老猫と子猫たちの愛情物語なんだから、「其ノ乳ヲ承_レ」(子猫たちが)老猫の乳を飲む」だろう。じゃあ、⑤の「受け入れた」に違いない。

解説

漢字の意味で攻めれば「承」は「承認・承知・承_レる」の「承」。何かを受

け取る」という意味がつかめれば「何かを与える」という逆の意味の①と④は絶対選ばない。さらに「子猫たちが老猫から「乳を」飲んだ場面が浮かんでいれば「老猫が子猫たちから」ものを受け取る意味の①と④はもちろん、「子猫が何かを理解する」、つまり「乳ではなく」概念を受け取る」意味の②と③を消去できる。熟語からわかるように、「承」は具体的なものではなく抽象的な概念を受け取る意味で多用される。漢字の意味だけでは②と③を消去できない。やはり、誰が何をどうしたという文脈、場面を考えつつ読める人が正解を手にするのである。

(2)

思考方法

第1段落では猫親子の愛情物語、第2段落では皇族親子の愛情物語というように、似たような話が続いている。よく似た話で説得力を高めるのは漢文にあるあるだ。

「狸奴ノ事(は)、適契フ(点が)有り」は、「猫親子の話は、(皇族親子の愛情物語に)共通する点がある」という読みで良さそう。「適」の「いい感じ・ピッタリ」な意味もヒントにして③を選んでみると、「ちょうど(皇族親子の愛情物語に)共通している」となり、まさにいい感じ。

解説

文脈を見ると「狸奴」↓「明德馬后、章帝母子」と血縁のない親子愛の話が続く。本文9行目「狸奴ノ事、(適)契フ有り」が「狸奴の話は、明德馬后、章帝母子の話に(よく)似ている」と訳せれば、未来のことを指し示す①、二つの話があまり似ていないという意味の②は消去できる。肯定的な意味の③、④、⑤はキープ。二つの話は、③なら「ちょうど」④なら「ほとんど」⑤なら「かならず」そっくりとなるが、ここからは漢字の意味で絞る。

まず波線部 a～e のおもな意味と読みを挙げておく。初歩的なものばかりなので、せめてカッコ外は覚えたい。

a 「矣」 原則読まず、断定（・命令・推量等）を表す↑この時は無視（読む時は「かな」と読み、詠嘆を表す）。

b 「也」「なり」と読んだり読まなかったりして断定を表す。疑問・反語の意味の時は「や／か」と読む（ほかに「A也」と読んで「Aよ」と呼びかけたり「Aというものは」と提示したり「何とAだなあ」と詠嘆したり）。

c 「耳」「のみ」と読んで限定・断定・強意を表す。

d 「焉」 原則読まず、語調を整えたり断定・疑問・反語などを表したりする（代名詞として「これ」「んん」とも読む）。「焉クンゾ」＝ why 「焉クニカ」＝ where も重要。

e 「已」「耳」と似た用法で使われる。限定や断定・強意を表す。

助字の意味に自信がある人なら「也（なり）」に伝聞の意味なし、③は×「焉（置き字）」に意志の意味なし、⑤は×と消去してもいいだろう。あとは文中での意味で判断。

波線部 a 「矣」の文は「出産間近だった」という淡々とした肯定文（＝平叙文。覚えておこう）なので「矣」は詠嘆・感動の意味ではない。ここで①、②を消去。

波線部 b 「也」の文は、子猫たちを我が子のように愛する老猫の様子を描いた平叙文。ここでもし本文が「作者の体験談」だと気づいていれば「也」が伝聞であるわけがないとわかるのだが、それには本文1文字目の「家」が作者の家であることを理解せねばならず、これは若干読み取りにくい。「也」の意味に自信がなければ③はキープ。

波線部 c 「耳」の文は限定の副詞「但ダ (only)」を含むことに注意。もし「耳」の限定・強意の意味がわからなくても「但」(耳)で「ただ」(だけ)」という限定の意味が推測できる。

波線部 d 「焉」の文は狸奴の話（＝狸奴之事）が主語の平叙文。人ではなく物が主語なので「焉」に意志の意味はない。よって⑤を消去。

波線部 e 「已」は一見すると限定の用法に見えるが、実は強意の意味で使われている。一つ前の文から読み直すと「AはBであるだけでない。AはCでもあるのだ」という形になっており、作者が特に強調したいのはCにあたる最後の文だとわかる。よって「已」のここでの用法は強意となる。「已」を限定で訳した場合、「この人外の者（＝親子になった老猫と子猫たち）に対しても恥ずかしいに過ぎない」となり、むしろ最後の文の内容を弱めてしまう。漢文読解に熟達した人なら、「已」の用法が限定でないことを理由にして②と⑤を消すこともできるだろう。

ここまで考えて残った③と④のうち、より確実な④を選べば正解。「也」に伝聞の意味があるかも」という不確かな推測ではなく、自信のある知識を根拠にしよう。

問 4 34

正解 ③

難易度 ★★★★★☆

所要時間 2分

設問パターン 作者の主張の理由

思考方法

「吁、亦た異なる哉（＝ああ、めっちゃ奇異だなあ！）」感嘆文だ。猫の親子

の愛情物語の最後だから、「良い話だなあ、めでたしめでたし！」って感じだ
 ろうか。全選択肢に「『○然』としていた○猫」という言葉が出てくる。○
 然」が「どの猫の、いつの時点での、どんな様子に該当するか」に注意して
 読むと、③以外は間違い。

解説

「子供を失って悲しんでいた（嗚嗚然）老猫の家に子猫たちがもらわれ、最
 初子猫たちは老猫に無関心（漠然）だったが、子猫たちは老猫を母として受
 け入れ（欣然）、老猫も安らかな様子で子猫たちを我が子同然に育てた（居
 然）」という文脈をもとに選択肢を順に消去していく。

- ① 子猫たちの様子である「欣然」を老猫の様子としている。消去。
 ② 「親子であることを忘れていた」の部分が、子猫たちが老猫のいる家にも
 らわれてきた事実と矛盾。消去。
 ③ 「漠然」→「欣然」という子猫たちの変化を正しく捉えている。キープ。
 ④ 老猫の様子である「居然」を子猫たちの様子としている。消去。
 ⑤ 子猫たちと出会ってから老猫の悲しみの記述はないので、老猫の「居然」
 とした様子は自分の愛を受け入れた子猫たちと一緒にいることによる、心か
 らの安らぎであって装いではない。消去。

問5 35

正解 ④

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 1分

設問パターン 白文の解釈

思考方法

「人子何必親生」。さすがに「何必〓何ぞ必ずしも」をわかりやすく訳してい
 る選択肢はないが、「生〓生む」の意味が入っている選択肢は④だけだ。「自
 分で産んだかどうかが大事なのではない」という内容も、妻に養子をとらせ
 た顕宗皇帝の発言にふさわしい。

解説

選択肢は、すべて「子というものは」で始まる。各選択肢の共通する部分
 は無視。

傍線部B「人子何必親生」の「何必」は「何ゾ必ずしも」（ヤ）と読ん
 で「（どうして）でなければならぬだろうか、いや／＼でなくてもよい」とい
 う反語の句形。とはいえ反語とわかっただけではどの選択肢も選べない。

傍線部Bは、子どものいない妻の明德馬后に養子を育てさせた顕宗の言葉
 であるから、文脈に合うのは④だけ。子どもを親元に置くべきか①、子ど
 もが親の思いどおりになるか②、親の気を引きたがるか⑤、子どもを
 どう育てるべきか③、については話していない。「我が子でなくても親子
 になれる」と顕宗は妻に説いたのである。

問6 36

正解 ⑤

難易度 ★★★★★

所要時間 2分

設問パターン 返り点つきの書き下し文

思考方法

傍線部も各選択肢も読点によって三つのパートにわかれている。真ん中の

パートの書き下し文はすべて同じなので、前のパートとうしろのパートを検討して正解の選択肢を選ぶ。傍線部Cの続きを読むと「亦タ此ノ異類ニ愧ツルのみ」同様にもこの異類にも恥じる」とある。(傍線部Cと) 同様に「恥じる」のだから、傍線部Cの「愧」の意味は「辱める」ではなく「恥じる」であると考えらるべきだろう。よって①、③、④は誤り。②と⑤の前半部分を検討する。②の「世の人親の子に与ふと為すも」を見ると子に何か与えるようだが、何を与えるのか本文からまったく読み取れない。⑤の前半「世の人親と子と為りて」を訳してみると、「世間で親と子になって」、真ん中と後半を続けて訳すとそれぞれ「不慈不孝な者がいるのは」「古人に対してだけ恥じるのではない」である。つなげると「世間で親子になって、(それなのに) 慈まず孝行しない者がいるのは、古人に対してだけ恥ずかしいのではない」という内容になり意味がおおるので⑤を選ぶ。

解説

傍線部Bと各選択肢は読点(、)で前中後の三つに分けられる。前半の書き下しは選択肢ごとに異なるので、すべて分析すると大変。スッと読めなければ後回しにして良い。

真ん中は「不慈不孝な者がいる」、後半は「豈ニ独リAノミBヤ(どうしてAだけがBだろうか、いやAだけがBではない) + 愧 + 于 + 古人」と読める。ちなみに真ん中の読みは各選択肢共通なので判断不要。

もし「愧」「古人」の意味・関係がわからなくても選択肢を見れば「古人のみを愧づかしめん」または「古人に愧づる」、つまり

- (i) 「古人(だけ)を辱める」①、③、④
 「(ii) 「古人に対して恥じる」②、⑤

の二択とわかる。

ここで傍線部Cの続きを読むと「亦タ此ノ異類ニ愧ツルのみ」同様にもこの異類にも恥じる」とある。「古人に対し恥じ」ている傍線部Cと同様に「恥じる」のだから、よって(ii)が正しく、最も見分けやすい誤答は①、③、④。

残った②・⑤の前半を頼りに傍線部Cの前半を読む。②の前半「世の人親の子に与ふと為すも」を見ると、子に何か与えるようだが何を与えるのか傍線部には書かれていない。既に述べられていて省略されているのかと探しても見当たらない。続きにも書いていない。何だかおかしい、と⑤に進む。⑤の前半「世の人親と子と為りて」を訳してみると、「世間で親と子になって」、真ん中と後半を続けて訳すとそれぞれ「不慈不孝な者がいるのは」「古人に対してだけ恥じるのではない」である。つなげると次の文のようになり、意味が通じる。

世間で親子になって

(それなのに) 慈まず孝行しない者がいるのは、
 古人に対してだけ恥ずかしいのではない。

この時点で意味のはっきりしない②を捨て⑤を選んでもいいが、傍線部Cの続きを読み「此ノ異類」が「人と異なるもの」狸奴」とわかれば、その続きに「この人ではない者(狸の親子)に対しても恥ずかしいのだ」を加えて、さらに自信をもって正解できるだろう。

問7 37

正解 ②

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 2分

設問パターン 作者の主張

思考方法

《思考方法》は《解説》を参照。選択肢を分析し、本文の内容との矛盾点を見つけて消去するのが最短最速。

解説

センター試験では、本文を読み終えたからといって作者の考えをスラスラと言葉にできなくてもよい。選択肢の内容が本文に書いてあるかさえわかれがいいのだ。内容が間違いの場合は選択肢の何が本文のどこと矛盾するのか、内容が本文と合致する場合はどこと対応するかもわかると文句なし。二つの文からなる選択肢を分析していこう。

① 猫の親子は「家族の危機を乗り越え」たわけではなく、もともと他人(他猫?)だった猫どうしが親子になったのである。「悲嘆のあまり人間本来の姿を見失った親子も、古人が言うように互いの愛情によって立ち直る」という記述はない。消去。

② 1文目、第1段落に合致。2文目、傍線部C以降に合致。キープ。

③ 「老猫の悲しみは癒やされることはなかった」が本文5行目の「居然」とした老猫の様子と矛盾。2文目はハッキリと誤りとは言いいくいが消去。

④ 「老猫は子猫たちを憐れんで」いるという記述はない。「(昨今の親子は)古人のように素直になれず、愛情がすれ違う」という記述はない。傍線部C「不慈不孝」は親子愛のすれ違いではなく親子愛がない様子だ。消去。

⑤ 子猫たちが「老猫に対して孝心を抱」いているという記述はない。「成長しても(↑本文に記述なし)肉親の愛情に恩義を感じない(不孝の)子」にのみ言及し、子供を愛さない(不慈の)親に言及がなく不十分。消去。よって②が正解。

【参考】接続詞「而」／反語の訳し方

接続詞「而」

この字は文脈によって「而シテ／而ルニ／而モ／而ルヲ」と読み、順接・逆接の接続詞として使われたり、そもそも読まなかったりする曲者だ。読まない場合、書き下しで直前になる字に「(シ)テ」「(ト)モ」等の送り仮名をつけて接続詞の意味を反映する。送り仮名「(シ)テ」または「而シテ」は、一見すぐに順接と判断したくなるが、そこがまた危ない。漢字辞典にも載っている次の故事成語が良い例だ。

「青は之を藍あゐより取りて藍あゐよりも青し」：知らない人は、「出藍しゆつらんの誉れ」でググるべし。青色の染料は植物の藍から抽出するが藍より鮮やかに青いことから、師匠に教えを受けた弟子が師匠を超えるという意味。

語彙はこの辺にして、何を隠そう、この「取りて」の「て」そして「抽出するが」の逆接の「が」は「而」なのだ。接続詞「而」を見たら、順接か逆接かを前後のつながりから判断せねばならない。「せやな」なら順接、「マジか」なら逆接だ。

反語の訳し方

「(どうして) ～ではないだろうか、いや～だ」「(どうして) ～だろうか、いや～ではない」：反語は、いったん真逆のことを言ってからそれを打ち消し、後半の言いたいことを強調する言葉のテクニク(＝修辞、レトリック)である。結局言いたいのは後半なので「いや～」以降だけ訳せばいいと教える人もいるが、前半の訳は途中式のようなもの。訳しておけば「反語読めます」「アピールになるので、スペースがあれば」「いや～」より前も書いておくべし。

通読

問題集や模擬試験の解説を読んで、偉そうに淡々と説明するだけの解説者に憤った経験はないだろうか。「こんな風に正確に読めたらそりゃ満点取れるよ！でも試験中は教科書も辞書もないし、時間もないからムリに決まっている(怒)」と。まったくそのとおり。そこで、限られた知識と時間の中で受験生が漢文に立ち向かう術をこの《通読》に示した。教科書や辞書が一切使えない状況を想定した「受験生のための通読」なので、ここでは詳細な文法解説などを省く(文法は《本文解説》の最後の《文法解説》にて詳しく解説)。自分の読解法に不安があれば、ぜひ本文を通読する上での参考にしてほしい。

通読の読み方

本文は太字にしてある。

() 「丸カッコ内」…文章を読んでいる解答者の心の声。

◎…限られた知識をフル活用して、なんとか内容を理解する上でのポイント。

まずはここを読んでほしいし、ここに書いたことは思いつくようにすべき。漢字知識は漢検準2級(高校在学)、未来のセンター受験者の平均を想定。

★…漢文が非常に得意な人の心の声。漢文を得点源にしたい人はこのレベルが目標。上級者になるにつれ、反射的に理解できる部分が増える。類推する時間も労力も初級者より少なくて済むので、楽しんで速く読める。ここまでくれば漢文はあなたの強力な味方だ。なお、◎と内容が同じ場合は省く。漢字知識は漢検2〜準1級、(受験生としてはかなりの)語彙力強者を想定。

読解の基本

そこまでひねった問題は出題されないの、基本的な文法知識と語彙でほぼ読める。意味がわからない字が出てきたら、その字を含む熟語をいくつか連想して文脈に当てはめてみよう。それでもわからなければ周りの文を見て、似た意味が対比されている字・表現があればそこから類推する。どうしてもわからなければ飛ばそう。気持ちとしては「うんうん、なるほど、それでそれ？」と問いかけてあげるように読むと良い。

それでは、通読開始！

(◎)序文ナシ。筆者と出典は程敏政『篁墩文集』…知らない。まあ読んでみよう。

第1段落 親子になった狸奴

家に一老狸奴を蓄ふ。

(◎)誰の家？ まあ「うちにさ〜」といえば語り手の自宅かな。注1、狸奴は猫。やしなうは養う。「飼う」か！

将子を誕まんとす (笑)。

(◎)いまにも子どもを生みそうだった。

一女童誤りて之に触れ、而して墮す。

(◎)女の子？ 之は直前にあるものは一老狸奴。墮胎の「墮」…老猫が流産し

たのか。★女の童わらわ下女か？

日夕ひよ鳴鳴然なげんたり。

(◎)日中と夕方？ 注2、鳴鳴然たりなげんは嘆き悲しんで泣いていた。子どもを亡くし老猫が悲しむ。★「日夕」は対義語からなる二字熟語だ。「昼も夜も」だな。

会たま両小狸奴おを餽おくる者有り。

(◎)「たまたま？ 訓読みどおりに読むか。狸奴は猫だから小狸奴は子猫。両つてことは二匹。おくる？ 訓読み通り読もう、子猫を二匹おくらせてくれた人がいたんだ。」

其の始め、蓋し

(◎)二匹の子猫が家に来てから。蓋は反語で「なんぞ〜ンヤ」と読む字だけども…この場合の意味と読みは何だっけ？ ★「蓋し」は「たぶん・思うに」か。始めは〜だった、ということはあると変化しそう。

漠然として、相ひ能くせざるなり。

(◎)注3、漠然としては無関心で…誰が何に対して無関心なんだろう？ 相ひ互いについてこと？ 能くせざるなりは何かが上手くないかなかった？ ★上手いかなかったのは会ったばかりの子猫と老猫か。大体は「相ひ互いに」だけど、訳さなくていい場合もあるから保留。猫三匹の新しい親子関係、当然すぐには上手くないかなだろう。

老狸奴なる者、従ひて之を撫なし、徬徨ほうわう焉たり、躑躅てきちよく焉たり。

(◎)なる者？ まあ明らかに主語は老猫だし「老猫は」だろう。従ひて…まさか子猫に服従じゃないよね。子猫のあとについていくのか。之は老猫以外のもの二匹の子猫。注4、徬徨焉たり、躑躅焉たりはうろろろしたり足踏ましたりして落ち着かない。

臥ふすれば則ち之を擁し、

(◎)臥？「Aスレバ則ちAする」という接続詞だ。之は老猫以外のもの二匹の子猫。擁は抱擁の「擁」…老猫が子猫たちを抱いた。★横臥の「臥」は横たわるという意味だな。

行けば則ち之を翊たすく。

(◎)行く？ 子猫たちがどこかに行く。之は老猫以外のもの二匹の子猫。翊…訓読み通りに読もう。老猫が子猫たちを助けた。

其の舐じを舐めて、之に食を譲る。

(◎)其の…何の？ 注5、舐…うぶ毛 之に何に？ 子猫たちを育てる老猫の様子を描いている場面だから、老猫がうぶ毛を舐める相手も食物を譲る相手も子猫たち。

両小狸奴なる者も、亦た久しくして相ひ忘るるなり。

(◎)子猫たちはしばらくして忘れた。何を忘れた？ ★先を読むと、子猫たちは老猫に懐いているので、「老猫が本当の母親でないことを忘れた(ようだった)」ということか。

稍く、之に即き、遂に其の乳を承⁽¹⁾。

(○) 稍く：訓読みどおりに「ようやく」？ 之：子猫たち以外。老猫。即：即位、即座。適切な熟語例がないから訓読みどおり読んで「老猫に」くつき「でいいか。其の」老猫の。承：承認の「承」：受け入れた。★古文では「やうやう」次第に。「ようやく」かもしれないけど。

⁽¹⁾ 自^レ是欣然として以て良に己の母なりと為す。

(○) 自是：問題だ！「自^レA」Aから「これから」。注6、欣然として「喜々」として。以て：「^レA」Aで・Aだから」とは違うみたいだ、保留。子猫たちは老猫を母として受け入れた！★欣喜雀躍の「欣」、注がなくても喜んでいことはわかる。よく見たら「以為」が含まれている。

老狸奴なる者も、亦た居然として良に己が出だすと為す^(b)也。

(○) 出産の「出」：老猫は子猫たちを本当に自分が産んだ子として扱ったんだ！注6、居然として「安らかに」。

^A 吁、亦た異なるかな。

(○) 問題だ！ 血縁のない猫の親子愛に感動する感嘆文。★異には複数の意味があったな。奇異とか特異のように、珍しいという意味か。ああ、なんと珍しいことか！

第2段落 明德馬后、章帝母子／まとめ

昔、漢の明德馬后に子無し。

(○) 注8、明德馬后：顯宗皇帝の妻で章帝の養母)

顯宗他の人子を取り、命じて之を養はしめて曰はく、

(○) 注9、ほかの妃が生んだ子を引き取って明德馬后に養育を託して)

^B 「人子何必親生。但だ愛の至らざるを恨むのみ」^(c)耳」と。

(○) 問題だ！「人子」はさつき出てきた。「何ゾ必ずしも」どうして必ずくだるか、いや〜とは限らない。「親」と「生」の意味は？

后遂に心を尽くして撫育し而して、

(○) 遂に：ついに、では訳が不自然？ ほかの人子を大事に育てて。★「そ

の結果」の方の「遂に」だな。

章帝も亦た恩性天至たり。

(○) 注10、章帝にも親への愛情が自然と備わっていた)

母子の慈孝、始終織芥の間無し。

(○) 「慈」しみと「孝」行心。注11、織芥の間無し：わずかな隔たりさえない。★血縁のない母子なのに、細かい「織」維や塵「芥」ほどの隙間もないほど親密な親子愛があった。

狸奴の事、⁽²⁾ 適契^{かな}ふ有り^(d)焉。

(○) 問題だ！「狸奴の事」が何に「かなう」？ 同じく血縁のない親子愛の話

である第2段落前半にそっくり、ということらしい。

然らば則ち、世之為人親与子、而有不慈不孝者、豈独愧于古人。

(◎問題だ！世の親子と古人の話。「豈AⅡどうしてAか、いやAでない」と「独AⅡAだけ」が含まれている。)

亦た此の異類に愧づる已。

(◎異類？ 何と異なる？ 愧づる…訓読みに従えば「恥じる」？ ★異類は人間でない生き物だったな。慙愧の「愧」Ⅱ恥じる)

(制作…関信成、小林美桜)